熊本県文化財調査報告第 294 集

古閑野田（こがのだ）遺跡

一般県道大野下停車場西照寺線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

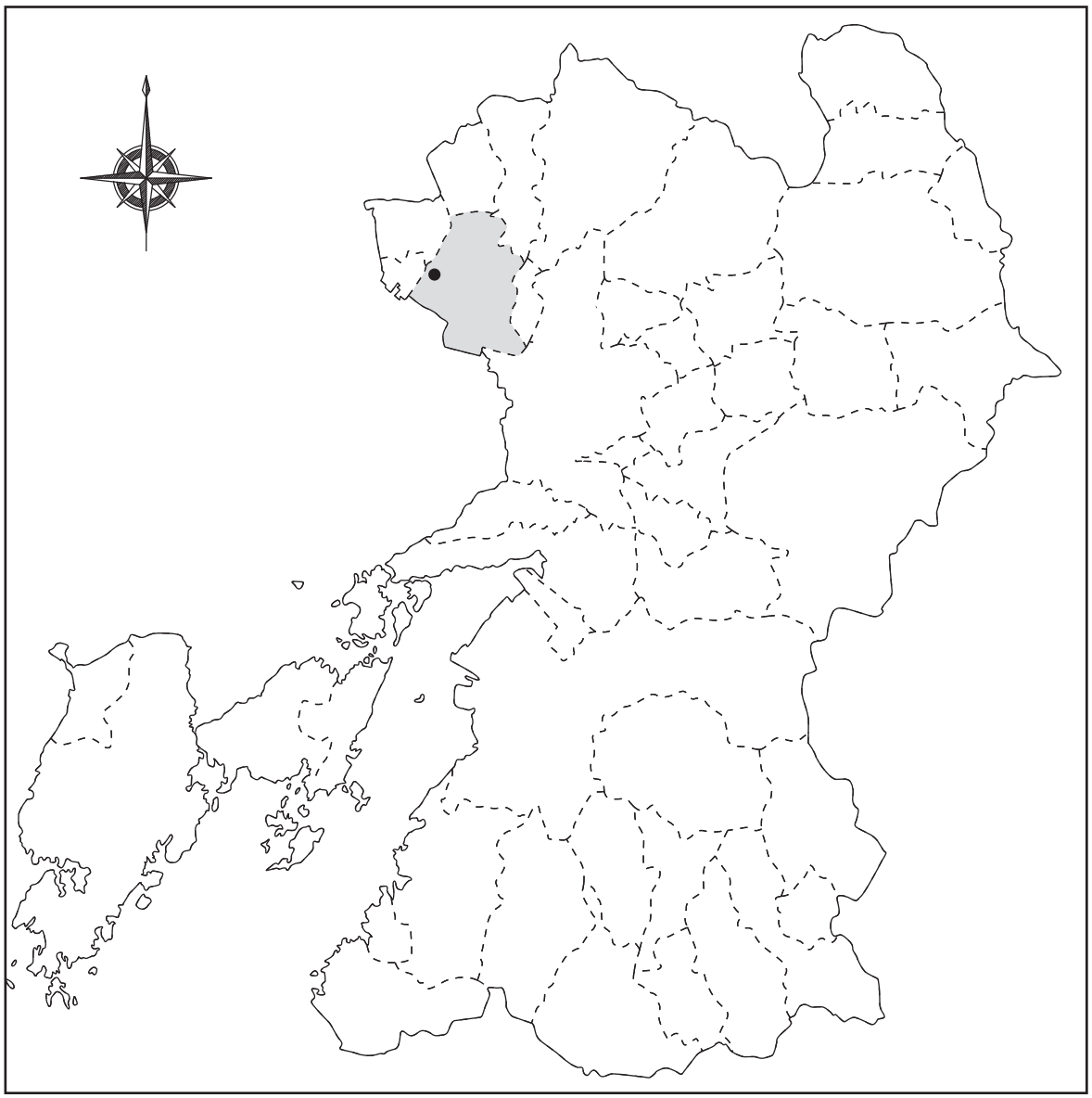
2014 年 3 月

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第294集

古閑野田（こがのだ）遺跡

一般県道大野下停車場西照寺線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2014年３月

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会は、一般県道大野下停車場西照寺線単県道路改良事業に伴い、平成 24 年度に、熊本県玉名市岱明町に所在する古閑野田遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、中世・近世・近代の水田の一端を発見しました。これらは、地域の土地利用の変遷、当時の人々の生活を知ることのできる良好な資料となりました。

今回まとめました本報告書が県民の皆様を始め、多くの方々に活用され、文化財保護、ひいては地域の歴史に対する関心と理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々、並びに関係機関、そして調査に対する指導・助言をいただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

平成26年３月31日

熊本県教育長　田崎　龍一

例　言

1　本書は、熊本県玉名市岱明町古閑に所在する古閑野田遺跡の発掘調査報告書である。
2　この調査は、熊本県玉名地域振興局の依頼を受け、一般県道大野下停車場西照寺線単県道路改良事業に伴う記録保存のための発掘調査として、平成 24 年度に熊本県教育委員会が実施した。
3　現地での発掘調査は、宮本大以下調査担当者が担当し、現地での遺構実測及び写真撮影も各調査担当者が行った。
4　現地での４級基準点及びメッシュ杭設置業務は株式会社ワールドコンサルタントに委託した。
5　遺物の実測は土野雄貴が行い、製図は川俣幸次が行った。
6　自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託して実施した。成果は、付論として本文の後に掲載している。
7　遺物の写真撮影は、宮本・川俣・土野が行った。
8　本文の執筆は、宮本・川俣・土野が章ごとに分担して行い、目次に記した。
9　本書の編集は、熊本県教育庁教育総務局文化課で行い、宮本・川俣・土野が担当した。
10　本書各章の直接的な引用・参考文献については、各章末尾に記載した。但し、順不同である。
11　本文の最後に、古閑野田遺跡における水利系統についての論考を、付論として土野が執筆した。
12　発掘資料の整理は、整理担当者が熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目 1667）において行い、記録及び遺物の保管も同所で行っている。

凡　例

1　調査区座標は、世界測地系である。
2　本書に記した方位は、方眼北を示す。
3　遺構実測図は、現地において遺構配置図 1/100、個別遺構図 1/10・1/20 で作成しているが、本書に掲載した地図、遺構実測図の縮尺は、それぞれに明記した。
4　遺物の実測は、原寸で行っているが、本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、1/3 で統一した。
5　土色、及び遺物の色彩表現は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）によった。
6　発掘遺構は、S を冠した３桁の数字で表し、原則として一桁目を調査区番号、二桁目以降は区ごとに発見順の通し番号とした。
7　出土遺物の胎土内混入物は肉眼観察で行ったが、判然としない微粒子については観察者の主観に基づいて以下の通りとした。
白色不透明＝「白色微粒子」、白色半透明･黒色光沢＝「結晶状微粒子」、鈍い金属光沢＝「金属光微粒子」

序文

例言・凡例

本文目次

Ⅰ.調査の概要（宮本）

1.調査に至る経緯 p. 1

2.調査の組織 p. 1

3.調査の経過 p. 2

Ⅱ.遺跡の立地と環境(川俣) p. 3

Ⅲ.調査の成果（土野）

1.調査の方法 p. 13

2.遺跡の層序 p. 13

3.１区の成果

１)遺構 p. 14

２)遺物 p. 14

4.２区の成果

１)遺構 p. 15

２)遺物 p. 18

５.３区の成果

１)遺構 p. 19

２)遺物 p. 20

６.４区の成果

１)遺構 p. 21

２)遺物 p. 22

Ⅳ.自然化学分析(株式会社 古環境研究所) p. 26

Ⅴ.総括 p. 35

Ⅵ.付論　古閑野田遺跡における水利系統について p. 36

挿図目次

Fig. 1　古閑野田遺跡周辺遺跡分布図 p. 5

Fig. 2　古閑野田遺跡調査区位置図 p. 8

Fig. 3　１区・２区遺構配置図及び土層断面図 p. 9･10

Fig. 4　３区・４区遺構配置図及び土層断面図 p. 11･12

Fig. 5　調査区基本層序模式図 p. 13

Fig. 6　水田畦畔 S104 実測図 p. 14

Fig. 7　１区出土遺物実測図 p. 14

Fig. 8　１区西壁土層断面図 p. 15

Fig. 9　２区西壁遺構確認状況 p. 16

Fig.10　水取 S203 実測図 p. 17

Fig.11　井手 S208 実測図　p. 17
Fig.12　２区出土遺物実測図１　p. 18
Fig.13　２区出土遺物実測図２　p. 19
Fig.14　水田 S303 実測図　p. 19
Fig.15　３区西壁土層断面図　p. 20
Fig.16　３区出土遺物実測図１　p. 20
Fig.17　３区出土遺物実測図２　p. 21
Fig.18　４区出土遺物実測図　p. 22
Fig.19　４区遺構実測図　p. 23
Fig.20　４区西壁土層断面図　p. 24
Fig.21　４区南壁土層断面図　p. 24
Fig.22　道路状遺構 S402 土層断面図　p. 24

表目次

Tab. １　古閑野田遺跡周辺遺跡一覧表１　p. 4
Tab. ２　古閑野田遺跡周辺遺跡一覧表２　p. 6
Tab. ３　古閑野田遺跡周辺遺跡一覧表３　p. 7
Tab. ４　古閑野田遺跡出土遺物観察表１（石器・石製品）　p. 22
Tab. ５　古閑野田遺跡出土遺物観察表２（土器・陶磁器）　p. 25

写真目次

PL１　１区検出状況･土層断面(全景)　p. 43
PL２　１区土層断面(接写)　p. 43
PL３　水田畦畔S104検出状況　p. 43
PL４　水田畦畔S104遺物出土状況　p. 43
PL５　自然流路S204検出状況　p. 43
PL６　２区土層断面　p. 43
PL７　水取S203完掘状況　p. 43
PL８　井手S208検出状況　p. 43
PL９　２区完掘状況　p. 44
PL10　谷S302･水田S303検出状況　p. 44
PL11　３区土層断面　p. 44
PL12　水田S303完掘状況　p. 44
PL13　谷S302包含層完掘状況　p. 44
PL14　４区完掘状況　p. 44
PL15　４区土層断面　p. 44
PL16　古閑野田遺跡出土遺物写真１(掲載番号１～13)　p. 45
PL17　古閑野田遺跡出土遺物写真２(掲載番号14～25)　p. 46
PL18　古閑野田遺跡出土遺物写真３(掲載番号26～35)　p. 47

おわりに

Ⅰ. 調査の概要

１. 調査に至る経緯

熊本県教育委員会は、熊本県玉名地域振興局土木部工務課道路係から一般道県道大野下停車場西照寺線単県道路改良事業に伴う「埋蔵文化財の予備調査について（依頼）」の提出を受け、平成 18 年２月８日～９日、平成 24 年９月 18 日に玉名市岱明町古閑地地内で埋蔵文化財の試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、熊本県玉名地域振興局長に対して、調査成果と発掘調査の必要性を通知した。

その後、平成 24 年９月 24 日付け玉名工第 39 号で文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」が熊本県知事蒲島郁夫から玉名市教育委員会を経由して熊本県教育委員会に通知された。

その後、平成 24 年９月 24 日付け玉名工第 40 号で「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が熊本県玉名地域振興局土木部工務課道路係から発掘調査の依頼と承諾書の提出を受け、平成 24 年 11 月９日付け教文第 1775 号で文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」提出し、発掘調査を開始することとした。

２. 調査の組織

（１）本調査（平成24年度）

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　小田信也（文化課長）
調査総括　　西住欣一郎（課長補佐）
　　岡本真也（文化財調査第二係長）
調査事務局　川上勝美（課長補佐）
　　中津幸三（課長補佐・総務・助成担当）
調査担当　　宮本　大（文化財保護主事）
　　川俣幸次、土野雄貴、宮川香織（非常勤職員）
　　荒木隆徳、井手秀一、稲本敏行、上田はつ子、牛丸数政、内浜繁代、田中幸介、田中鳴美、塚本 勇、
　　西山雅廣、原田政雄、藤井勇二、藤本龍三、松本直美、山下真澄、吉永孝夫（発掘作業員）

（２）整理作業（平成25年度）

整理主体　　熊本県教育委員会
整理責任者　小田信也（文化課長）
整理総括　　西住欣一郎（課長補佐）
　　岡本真也（主幹兼文化財調査第二係長）
　　後藤克博（文化財資料室長）
整理事務局　馬場一也（課長補佐）
　　廣石啓哉（主幹・総務・文化係長）
整理担当　　宮本　大（文化財保護主事）
　　川俣幸次、土野雄貴（非常勤職員）
　　白木はる乃、島川千秋、佐々木舞（整理作業員）

３.調査の経過

平成24年

12/10：　プレハブ設置開始。S101・S102・201・301確認。

12/13：　作業員作業開始・調査器材搬入。

12/14：　調査区水利系統の現地踏査。

12/18：　重機による表土剥ぎ開始。

12/27：　年内現場〆。３区S302検出。

平成25年

１/５：　年明け現場初日。

１/７：　４区遺構検出状況撮影（１回目）。

１/９：　２区土層断面撮影。S202・S209検出。

１/10：　測量基準杭敷設。１区土層断面・２区包含層検出状況・３区土層断面撮影。

１/23：　S104検出。

１/29：　S204検出。

２/７：　１区完掘状況撮影。S208検出。

２/21：　S203追加検出状況・２区完掘状況撮影。

３/４：　３区完掘状況撮影。

３/５：　荒尾市でPM2.5濃度上昇。規制値を越える恐れのため、無用の外出を控えるよう管内放送あり。

３/８：　４区拡張・完掘状況撮影。

３/11：　１～２区埋め戻し。

３/12：　３～４区埋め戻し。

３/14：　調査器材・出土遺物搬出。作業員作業終了。

３/18：　プレハブ撤去。

II. 遺跡の立地と環境

今回調査を実施した「古閑野田遺跡」は、玉名市岱明町古閑（旧、玉名郡岱明町古閑）に所在する。岱明町古閑は玉名市の西部、一般国道 208 号の南側に位置し、田畑の中に集落が点在する。地区の西部を二級河川の行末川（西照寺川）が南流し、島原海湾（有明海）に注ぎこむ。当該地域では地質時代区分の更新世末期、最終氷期（約 7 ～ 1 万年前）における有明海の海面低下、雨水等の浸食・下刻により、複雑で起伏のある地形が形成された。調査箇所 4 区のうち 3 箇所が低地の水田内に、残り 1 箇所が集落や道路の存在する微高地にあたり、それぞれ標高約 7 ～ 12 mを測る。遺跡範囲としての立地は、玉名台地端部の低位段丘から、西側の小さな沖積地（谷底平野）へまたがっているといえる。

周辺に分布するおもな遺跡としては、旧石器時代の包蔵地、縄文時代の貝塚・包蔵地、弥生時代の貝塚・環濠集落跡、古墳時代の集落跡・前方後円墳、古代の集落跡などが挙げられる。中世以降の遺跡・史跡については後述 (p. 30、「IV. 総括」) する。

旧石器

旧石器時代後期のサヌカイト製ナイフ形石器が表面採集されたのは、岱明町西照寺の [**※遺跡番号 182**] 備中原遺跡である。国道 208 号沿いの、北の荒尾市との市境に所在する。石材のサヌカイトは岱明周辺では産出しない。他にも岱明町今泉の **[406]** 今泉遺跡、岱明町野口の **[429]** 年の神遺跡でそれぞれナイフ形石器が発見されている。

縄文

縄文時代のものとしては、今回調査地点の約 600 m東南に位置する **[411]** 西松手遺跡 (古閑遺跡・包蔵地) から、土器・石斧・石鏃などが出土している。同じく包蔵地の岱明町大野下の **[571]** 目倉尾遺跡からは、縄文早期の押型文土器が出土した。他に岱明周辺でこれらに後続する縄文遺跡としては、縄文中～後期の貝塚が複数箇所確認されている。

弥生

弥生時代の遺跡では、県下初の弥生前期貝塚発掘例となった、岱明町山下の **[590]** 中道遺跡がある。県立玉名高校考古学部によって、昭和 27 年に調査がおこなわれた。遺跡は台地縁端の畑地内にあり、崖面に貝層が露頭していた。貝はカキ殻を中心に、獣骨・魚骨などの動物遺存体、土器・石器類などとともに、炭化米が数十粒採取された。これに後続する弥生遺跡としては、近年発掘され新聞等で報道された、弥生中～後期の環濠集落跡である **[470]** 塚原遺跡がある。岱明町野口塚原に所在し、環濠・円形の大型竪穴建物跡・甕棺墓などが確認され、菊池川下流域の環濠集落跡としては初の発掘例となった。近隣にはゴホウラ製貝輪が出土した **[429]** 年の神遺跡（支石墓）もあり、海上交易の中継地・拠点集落だったとみられている。

古墳

古墳時代の遺跡としては、集落跡・箱式石棺墓・前方後円墳・円墳などの発掘例がある。岱明町高道には **[598]** 藤光寺古墳（前方後円墳）が所在する。昭和 39 年に一部調査されており、全長 85 mを測るが、前方部は削平され現在は神社が建っている。他にも墳丘自体は現存しないが、画文帯神獣鏡・鉄刀などが出土した岱明町開田の **[196]** 院塚古墳（前方後円墳）跡地や、古墳参考地数箇所が確認されている。

古代

岱明周辺における奈良・平安時代の遺跡としては、岱明町開田の **[198]** 不馬向遺跡の住居址から、青磁皿・土師器・土鈴が出土している。岱明町庄山の **[413]** 簇布遺跡（集落跡）からは青磁碗・土師器が出土している。平成 14 年の旧岱明町・県文化課の合同調査による『玉名平野条里跡・下河原』（岱明町野口　下河原に所在）の報告によれば、明確な条里制遺構は確認されなかったが、中世～近世の水田跡が確認されており、瓦質土器・青磁等が出土している。

菊池川下流域の沖積平野は、後氷期（完新世）に入ってからの温暖化による縄文海進・弥生小海退などにより拡大したという。約６千年前の最大海進時には、有明海の海岸線位置は標高で現在より５ｍほど高く、汀線が内陸部に入り込んでいたと考えられている。海進時に段丘周辺に堆積した砂礫層の上に、現代の水田地帯が営まれている。岱明町一帯の段丘は約２万年前に堆積した砂礫層（岱明層）が主体で、沖積面との比高差は５～10ｍあり、下流方向にゆるく傾斜している。段丘の南に点在する縄文遺跡の [594] 庄司貝塚・[602] 古閑原貝塚・[575] 浜田貝塚はこの辺縁にあたり、当時の海岸想定ラインに沿って確認されている。

今回の調査対象地大半を占める行末川左岸、標高７ｍ前後の低地付近（行末川河口から内陸へ４km）に、海進時に海岸線が来ていたかどうかについては、地下地質深部の化学分析を行っておらず言及できない。調査区内の下層位で確認された砂礫層が、行末川の蛇行などによって形成されたとすると、旧氾濫原～後背湿地に現代の水田が営まれているものと推察される。今回その下に古い水田面・包含層がいくつか確認されたが、出土遺物等の観察から、中世より前にさかのぼる可能性は無いと判断した。本調査では当該遺跡内において、原始～古代の人類活動の顕著な痕跡は確認できなかった。

※遺跡番号は『玉名市遺跡地図』に準拠する。

参考文献

『地形と土壌』 新地学教育講座９　地学団体研究会編

『玉名平野条里跡・下河原』 岱明町文化財調査報告第１集　熊本県玉名郡岱明町教育委員会　2004

『玉名市史　通史篇上巻』 玉名市立歴史博物館こころピア　玉名市　2005

『岱明町史』 岱明町史編纂委員会・執筆委員会　岱明町　2005

『玉名市遺跡地図　−玉名市遺跡詳細分布調査−』 玉名市文化財調査報告第 26 集　玉名市教育委員会 2012

Tab.1　古閑野田遺跡周辺遺跡一覧表１

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	出土遺物・備考
182	備中原遺跡	西照寺　備中原	旧石器	包蔵地		ナイフ形石器
183	西照寺跡	西照寺　備中原	中世	寺社		現在光現寺あり
184	西照寺跡五輪塔群	西照寺　備中原	中世	寺社		五輪塔・宝塔・宝篋印塔等の残片堆積
185	野内地蔵石像	西照寺　野内	近世	石造物		砂岩丸彫巨像、堂内に祀る
186	西照寺古墳（参考地）	西照寺　迎田	古墳	古墳		現西照寺氏神、八幡社地全体
187	野内遺跡	西照寺　野内	弥生・古墳	包蔵地		量少ない
188	大乗妙典碑	古閑　野田	江戸後期	石造物		
189	寺内古墳（参考地）	開田　寺内	古墳	古墳		前方後円墳か
190	塚山寺院跡	開田　寺内	中世	寺社		跡地に観音を祀ったが、現在は民家にあり
191	泉福寺跡	開田　稲繁	中世	寺社		跡地に観音を祀る　吉宝寺跡、五輪塔断片散在
192	化土寺跡	開田　箱崎	中世	寺社		跡地に観音を祀る
193	律泉庵跡	開田　律仙	中世	寺社		跡地に薬師を祀る　天台宗
194	律泉庵薬師堂	開田　棚田	中世	寺社		吉宝寺跡、断片散在
195	万福寺跡	開田　棚田	中世	寺社		跡地に観音を祀る
196	院塚古墳跡	開田　京塚	古墳	古墳		前方後円墳、昭和39年工場建設のため現存せず
197	開田経塚	開田　京塚	中世	墳墓		完形封土　上に石碑あり
198	不馬向遺跡	開田　不馬向	平安	住居跡		青磁皿・土鈴・土師器出土
199	浮田下ノ池の吐井手	築地　西ノ山	近世・近代	水制	市	登録
200	関忠之丞頌徳碑	築地　西ノ山	近世・近代	石造物		浮田の池についての碑
201	西ノ山北遺跡群	築地　西ノ山	旧石器・古代～近世	包蔵地		土師質土器・近世陶磁器を表採
202	西ノ山遺跡群	築地　西ノ山	旧石器・古代	包蔵地		黒耀石とサヌカイト片が多量に散在　蔵骨器が4個出土
203	西ノ山古墳群	築地　西ノ山	古墳	古墳		1号竪穴石室か　2号横穴巨石積木棺埋葬
204	築地池下遺跡	築地　池ノ下	弥生～中世	包蔵地		住居跡　土器・須恵器・陶磁器・石鍋ほか出土
205	前畑遺跡	築地　前畑	縄文～中世	包蔵地		平畑遺跡と一連
206	池田古墳	開田　池田	古墳	古墳		土人宝物埋蔵地
207	庄山中ノ尾遺跡	庄山　中ノ尾	弥生～中世	包蔵地		

※「玉名市遺跡地図」玉名市文化財調査報告第26集、
『玉名市基本図3』玉名市を引用、一部改変。

Fig.1　古閑野田遺跡周辺遺跡分布図

Tab.2　古閑野田遺跡周辺遺跡一覧表２

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	種　別	指定	出　土　遺　物　・　備　考
208	京塚遺跡	西照寺　中尾原	弥生～古墳	包蔵地		院塚古墳周辺
209	兎町遺跡群	築地　兎町・西田	弥生	包蔵地		ぶどう畑開墾で発見
392	西徳王丸五輪塔	古閑　古閑原	中世	石造物		
393	徳王丸屋敷跡	古閑　古閑原	中世	屋敷跡		五輪塔・宝塔の残欠散在、北側に空堀・土塁跡
394	大悟山平等寺跡	上　長津野	古代・中世	寺社		毘沙門堂あり
395	伊勢守紀光隆の墓	上　長津野	中世	墓	市	五輪塔、石玉垣在名
396	大悟山平等寺毘沙門堂	上　長津野	古代・中世	寺社		
397	上の六地蔵石幢	上　馬場原	中世	石造物	市	現在地数m東へ移転
398	北清寺跡	上　馬場原	中世	寺社		釈迦堂あり　五輪塔1基
399	林田観音堂	三崎　本村	中世	寺社		寺院跡と思われる観音堂あり
400	陣館跡	三崎　陣　堂の前	中世	館跡		北に300mに上村城跡、五輪塔残欠散在
401	陣の五輪塔	三崎　陣	中世	塔碑		五輪塔雑組、岱明町最古の在銘　正平21年（1366）
402	満福禅寺跡	三崎　陣	中世	寺社		観音堂あり
403	中尾崎遺跡	大野下　中尾崎	弥生	包蔵地		弥生後期
404	万福寺跡	中土　四郎丸	中世	寺社		跡地に地蔵堂、五輪塔片
405	地辺寺跡	扇崎　野添	中世	寺社		跡地に阿弥陀堂あり
406	今泉遺跡	上　今泉　市井川	旧石器・弥生	包蔵地		ナイフ形石器・石包丁、土器
407	今泉古墳	上　今泉	古墳	古墳		円墳　現存せず
408	吉宝寺跡	上　今泉	中世	寺社		薬師堂あり
409	今ノ本遺跡	上　今ノ本	弥生	包蔵地		土器片多量包含
410	岩倉山平等寺跡	上　今ノ本	中世	寺社		大悟山平等寺の寺号をつぐ、明治まで存続
411	西松手遺跡	古閑西市井川　上西松寺	縄文	包蔵地		(古閑遺跡)磨製石斧数個・土器・石鏃
412	上村城跡	上　馬場原	中世	城跡		物見台、土塁、周溝に野樟を残す　五輪塔残欠多数
413	簇布遺跡	庄山　簇布	奈良～平安	集落跡		青磁碗・土師器出土
414	東簇布遺跡	庄山　松浦、中山	弥生	包蔵地		弥生後期～終末土器少量
415	天神木遺跡	中土　天神木	弥生	埋葬		甕棺・合口甕棺
416	中土屋敷跡	中土　天神木	中世	屋敷跡		土塁、濠、中塚、現在駐車場
417	中土楢の尾遺跡	中土　楢ノ尾ほか	縄文・弥生	包蔵地		縄文後期～弥生後期
418	西中土五輪塔群	中土　四郎丸	中世	石造物	市	登録　3基内1基に在銘
419	願正寺跡	中土　西原	中世	寺社		
420	東中土遺跡	野口　西原	弥生	包蔵地		弥生土器
421	下野口西原遺跡	下野口　西原	弥生	埋葬		石蓋土壙墓
422	塚原古墳	野口　塚原	古墳	古墳		円墳、完形封土箱式石棺
423	二仏庵跡	野口　塚原	中世	寺社		観音を祀る石祠、五輪塔片散在
424	塚原石蓋土坑墓群	野口　塚原	弥生	埋葬		石蓋土壙墓2基
425	菊ノ尾天神木古墳	築地　天神木	古墳	古墳		立太子禮記念　昭和27年11月建立　社殿建設で封土は扁平されたか
426	菊ノ尾天神木遺跡	築地　天神木	弥生	包含層		
427	下前原西遺跡	下前原　石町	古墳	包蔵地		須恵器片多数
428	浄幸寺跡	下前原　西	中世	寺院跡		薬師堂あり
429	年の神遺跡	野口　平	旧石器～弥生後期	包蔵地		ナイフ形石器　甕棺、住居址、貝塚、年の神西平遺跡、年の神遺跡
	年の神支石墓	野口　早馬	弥生	埋葬	市	ゴホウラ貝輪
	年の神小児甕棺群	野口　北平	弥生	埋葬		合口壷形棺数基
	年の神甕棺群（A）	野口　早馬	弥生中期	埋葬		大型3基
429	年の神甕棺群（B）	野口　早馬	弥生	埋葬		3個接合を中心とする
430	築地次郎国秀館跡	下前原　中	中世	城館跡		大野庄領主居住陣内屋敷と称される

Tab.3　古閑野田遺跡周辺遺跡一覧表３

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代	種　別	指定	出　土　遺　物　・　備　考
431	前原宗因の墓	下前原　東	中世	墓		築地国秀館跡内、安山岩自然石銘あり
456	正覚寺跡	下前原　東原		寺社		跡地に千手観音を祀る
459	今見堂遺跡	築地　今見堂	古代・中世	包蔵地		土葬人骨1、五輪塔片、宋銭、青磁、土師器皿
470	塚原遺跡	野口　塚原	弥生中～後期	集落		環濠集落、住居址・甕棺
566	千人塚古墳	扇崎　鬼除	古墳	古墳		円墳完形　封土良好
567	扇崎千人塚供養塔	扇崎　鬼除	近世	墳墓		寛政4年溺死者の供養塔
568	扇崎遺跡	扇崎　本村	古墳	包蔵地		土師器・須恵器片
569	扇崎要害の森館跡	扇崎　明神尾	中世	屋敷跡		土塁・周溝をめぐらす、現在民家
570	扇崎野中遺跡	鍋　中西、野中	古墳	包蔵地		土師器・須恵器片
571	目倉尾遺跡	大野下　目倉尾、神次郎丸	縄文	包蔵地		楕円・山形押型文土器
572	内野城跡（下村城跡）	大野下　内野	中世	城跡		土塁、天守台、水溝の一部残す
573	大跡遺跡	中土　四郎丸	古墳	包蔵地		完形土師器2個
574	浜田西原遺跡	浜田　西原	古墳	包蔵地		主に須恵器・土師器
575	浜田貝塚	浜田　西原	縄文	貝塚		縄文土器片、石錘出土
576	浜田西原古墳（参考地）	浜田　西原	古墳	古墳		石材を残す、古塔碑あり
578	香積寺跡	鍋　寺	中世	寺社		跡地に光寂寺再建
579	満福寺跡	鍋　原口	中世	寺社		跡地に地蔵堂あり
580	上鍋遺跡	鍋　小路	縄文	包蔵地		蛇紋岩製石斧
581	村下新地堤防	鍋　村下五ノ割ほか	近世・近代	干拓堤防		
582	北原新地堤防	鍋　芝洲ほか	近世・近代	干拓堤防		
583	中土館跡	中土　寺ノ前	中世	城館		土塁、濠跡、中世貝塚、土器類
584	中土の六地蔵石幢	中土　寺ノ前	中世	石造物	市	登録　総高2.58m
585	中土貝塚	中土　西分	弥生	貝塚		弥生土器片出土
586	荒野尾五輪塔	中土　荒野尾	中世	石造物		塔断片散乱
587	中土遺跡	中山　西分・大跡	縄文	包蔵地		御領式中心
588	山下西遺跡	山下　北原・久保	縄文	包蔵地		縄文後期以降
589	山下前畑遺跡	山下　前畑	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器
590	中道遺跡	山下　天神木	弥生	包蔵地		炭化米出土、弥生前期貝塚あり
591	仏教寺跡	山下　天神木	中世	寺社		
592	山下木佐貫貝塚	山下　木佐貫	縄文	貝塚		
593	山下木佐貫遺跡	山下　木佐貫	弥生	集落		完形品多数出土
594	庄司貝塚	山下　庄司	縄文中～後期	貝塚		阿高式土器
595	無量山寿福寺跡	浜田　東原	中世	寺社		慶長年中跡に再建
596	幸長寺遺跡	高道　幸長寺原	弥生後期	包蔵地		須恵器・土師器散布
597	幸長寺跡	高道　幸長寺	中世	寺社		跡地に薬師堂あり
598	藤光寺古墳	高道　大馬場	古墳	古墳		前方後円墳、前方部に天満宮あり
599	藤光寺跡	高道　大馬場	中世	寺社		前方後円墳、後円部の東、今薬師堂あり
600	石橋遺跡	高道　石橋	弥生	集落		野部田式土器包含、貝塚あり
601	イッチャンサン遺跡	高道　久々牟田	弥生	包蔵地		野部田式土器多量出土
602	古閑原貝塚	山下　久々牟田	縄文中～後期	貝塚		阿高式土器、炭化籾
603	高道城跡	高道　城内	中世	城跡	市	本丸跡に菅原神社、北側に水濠跡あり
604	弁財天古墳	高道　石橋	古墳	古墳	市	前方後円墳、割石小口積の横穴式石室、舟形石棺
605	野口前遺跡	野口　平	弥生	住居跡		弥生後期竪穴住居址
606	大野十左衛門一隆の墓	滑石　萬正寺	近世・近代	墓		大野家累代墓地内　滑石村庄屋水利に功
699	新浜堤防	鍋　三ノ割ほか	近世・近代	干拓堤防		慶応2年築造
788	**古閑野田遺跡**	**古閑　野田**	**古代～近代**	**生産・散布地**		**土師器・須恵器・青磁・染付・瓦質土器**

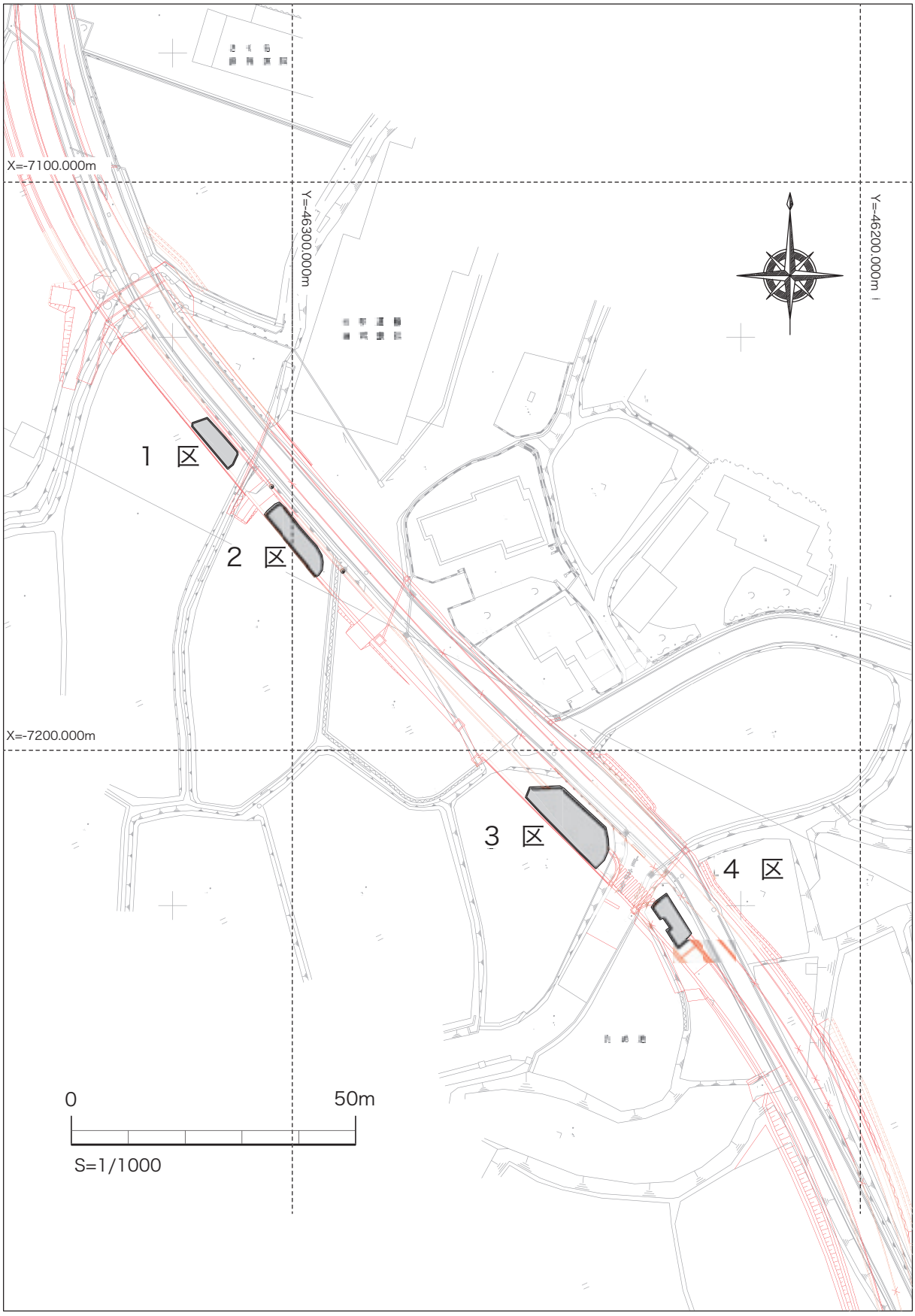


Fig. 2　古閑野田遺跡調査区位置図

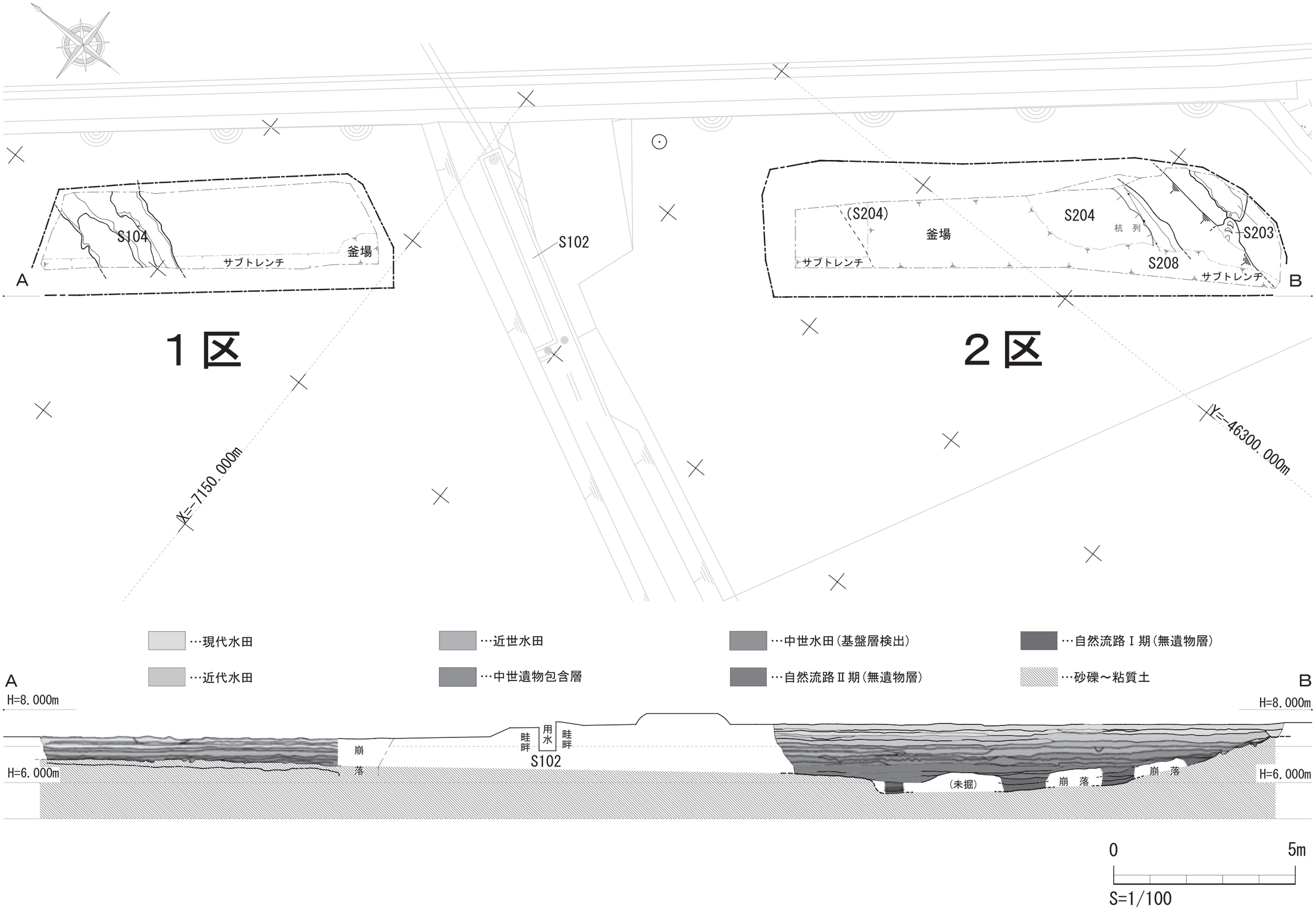


Fig. 3　1区・2区遺構配置図及び土層断面図

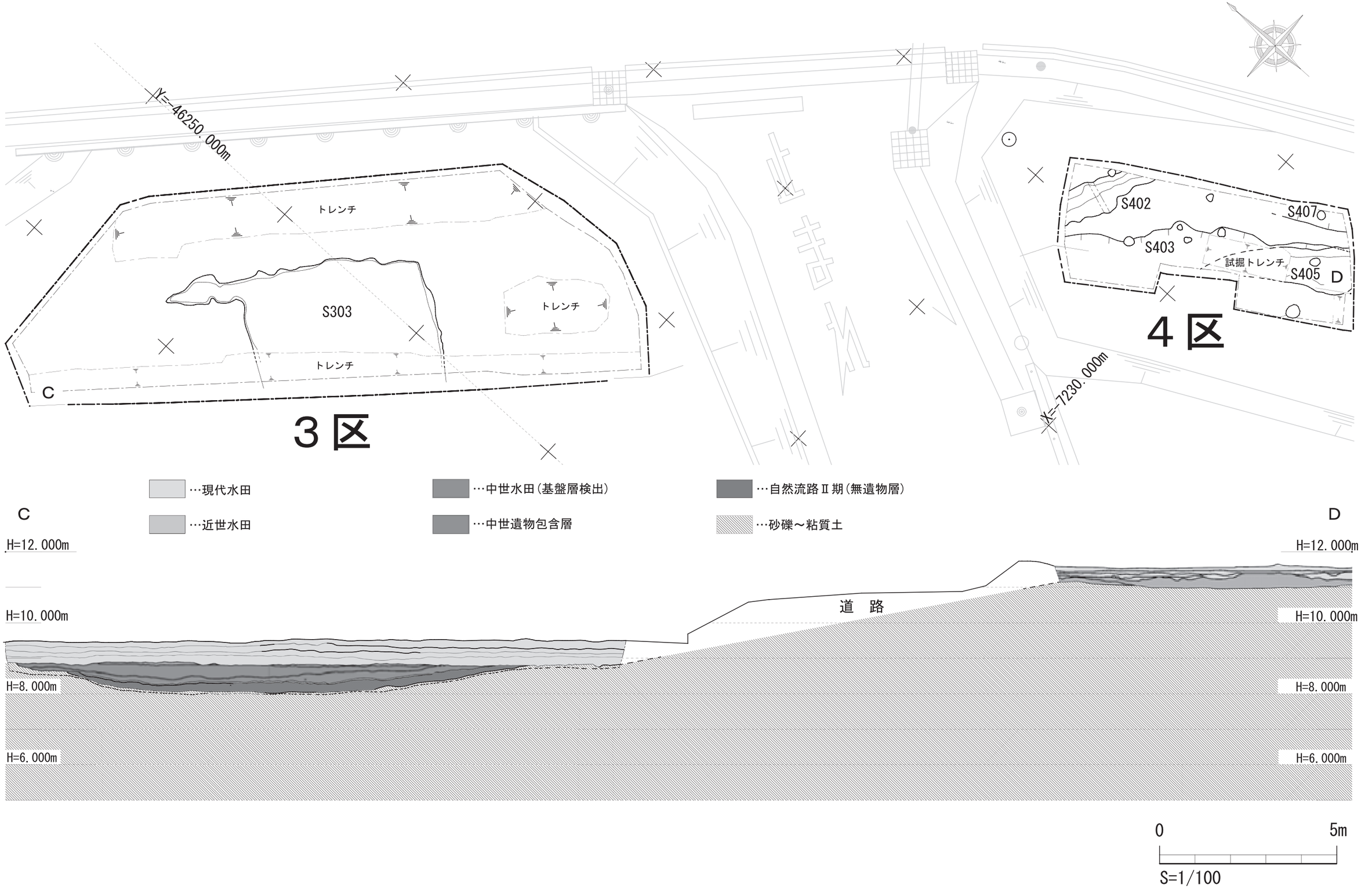


Fig. 4　3区・4区遺構配置図及び土層断面図

III. 調査の成果

1. 調査の方法

古閑野田遺跡における本調査は、試掘結果によって表土と位置づけられた層序までを重機で掘削し、遺物包含層以下を人力で掘り下げ遺構検出を試みるという方針で進めたが、発注者との協議の結果、現県道との間に1m、現水田に伴う灌漑施設との間に2mの余白を設け、設備保全及び安全確保を図ることになった。この結果調査範囲は4区に分かれ、北から順にこれらを1区・2区・3区・4区とした。

調査に際しては、現地表面から1m以上の掘削を伴うため調査区外周に安全勾配を設ける必要があり、各区における実際の調査面積はきわめて狭小になった。このため最低調査単位としてのグリッドは設定せず、遺構外遺物については調査区ごとに一括して取り上げた。

調査区の掘削については自然地形の露出を目指したが、諸般の事情により無遺物層までの掘削にとどめた場合もある。

2. 遺跡の層序

1～3区に共通する特徴としては、ローム由来のシルト質土層と花崗岩由来の水成堆積粘土層とに大別される点が挙げられる。前者は自然地形の影響をあまり受けず、各層ともおおむね均等な厚みで客土されている。後者は地形に従うが、遺物を伴い波打つように堆積する上位と、遺物を含まず平滑な堆積状況を呈する下位とに分かれる。両者はさらに、砂礫をあまり含まない上半と砂礫主体の下半とに区別され、堆積の基本単位をなすとみられる。4区は、すべての層序がローム由来シルト質土で構成されていた。

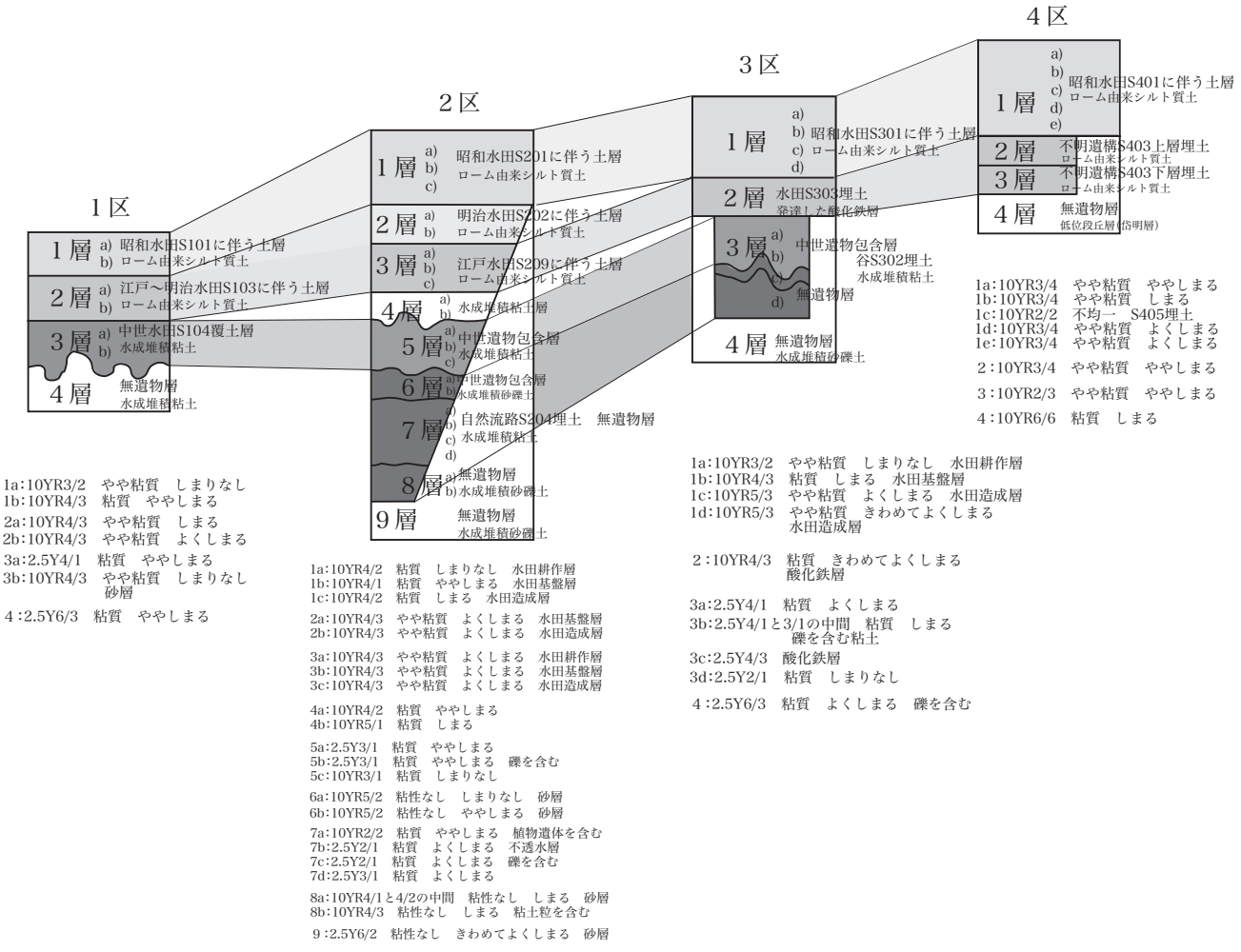


Fig. 5　調査区基本層序模式図

3.1区の調査

1)遺構(Fig.3参照)

1区において検出された遺構は4基ある。いずれも水田およびその関連施設とみられる。

S101：昭和後半期に造成され現在まで継続利用されている水田。断面のみ確認。基本層序1区1層を構成する。

S102：水田S101へ用水する井手及び井堰。調査区外だが関連施設であるため1区に含めた。

S103：近世後半期とみられる水田。断面検出のみ。基本層序1区2層を構成。

S104：中世期の遺物を伴う水田の畦畔及び井手。基本層序1区3層土に覆われる。

これらのうち水田S103については、重機による表土剥ぎ後の調査区壁面観察によって気づいたため平面としての確認は出来ず、平面として検出し得た遺構は水田畦畔S104のみだった。

水田畦畔S104は2条の帯状酸化鉄面で、総じて不明瞭・不定形なプランを有する。両酸化鉄帯の間隙には明瞭な空白があり、2枚の水田の両端とそれぞれを区画する小畦畔を想定できる。

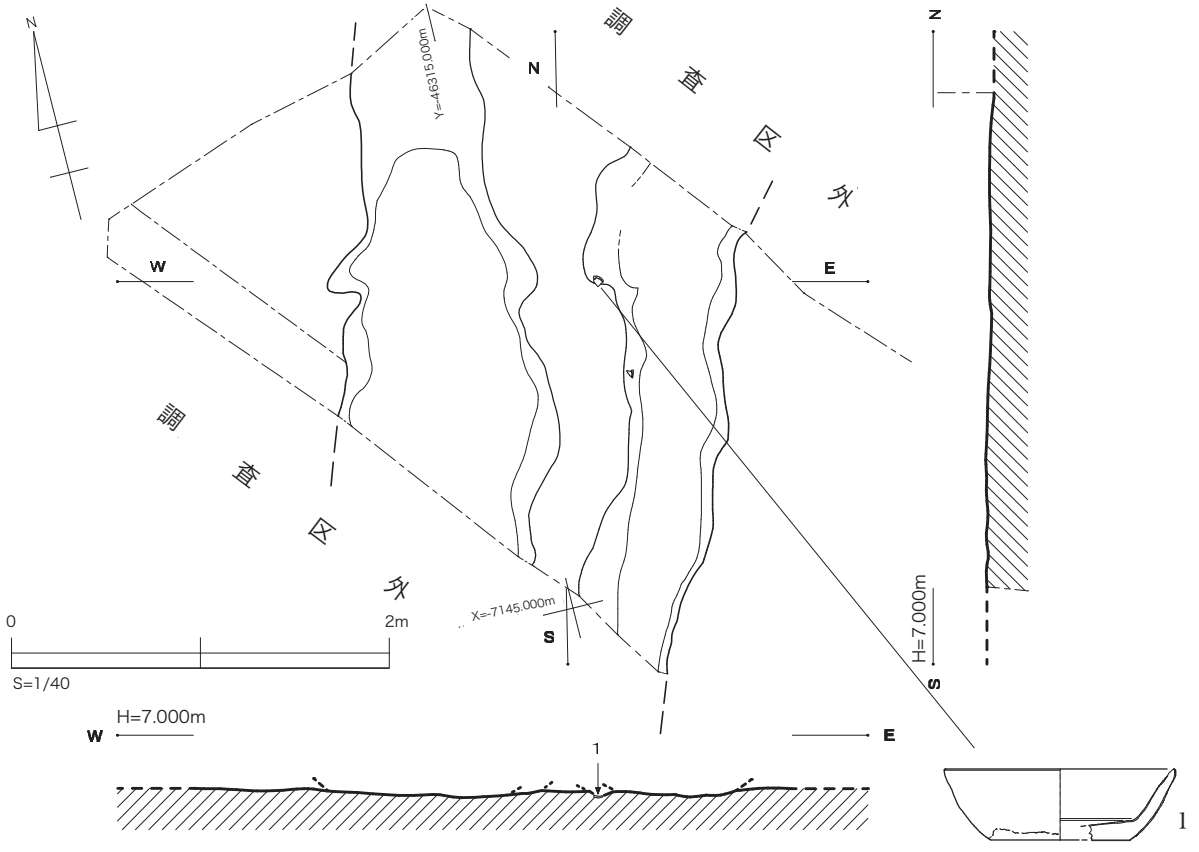


Fig.6　水田畦畔S104実測図

2)遺物(Tab.5参照)

1は白磁の小皿である。かすかに緑色を帯びる釉薬が外面体部下半付近まで塗られた後に口禿げを施してあり、見込外縁には片刃切り込み痕が見られる。太宰府磁器編年の白磁F期（13世紀後半～14世紀前半）における特徴と類似する（山本信夫2000）。

このほか、腰岳産とみられる黒曜石片が遺構外から出土している（2）。使用痕のある剥片で、縄文期の所産と想定される。

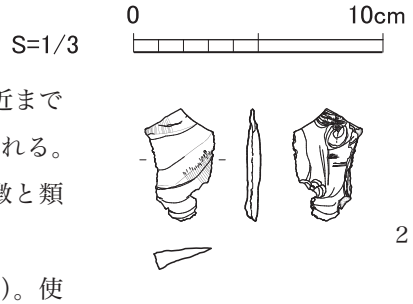
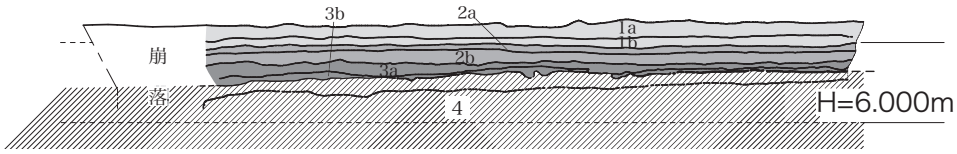


Fig.7　1区出土遺物実測図



1a:10YR3/2　やや粘質　しまりなし
1b:10YR4/3　粘質　ややしまる

2a:10YR4/3　やや粘質　しまる
2b:10YR4/3　やや粘質　よくしまる

3a:2.5Y4/1　粘質　ややしまる
3b:10YR4/3　やや粘質　しまりなし
砂層

4 :2.5Y6/3　粘質　ややしまる

水田S101耕作層・造成層

水田S103耕作層・造成層

畦畔S104検出層

無遺物層

Fig. 8　1区西壁土層断面図

4．2区の調査

1）遺構（Fig. 3参照）

断面検出のみを含め9基の遺構を検出した。水田及び関連遺構と自然地形とに分かれる。

S201：昭和後半期から現在まで継続利用される水田。基本層序2区1層を構成。断面のみ確認。

S202：明治期に造成されたとみられる水田。基本層序2区2層を構成。断面検出のみ。

S203：水田 S202 に伴う水取及び井手跡。基本層序2区2層土を主たる埋土とする。

S204：中世以前に遡る自然流路の痕跡。基本層序2区5層に覆われ、同6層・7層土を埋土とする。

S205：水田 S209 に伴う畦畔跡。断面検出のみ。基本層序2区3層に包含される。

S206：水田 S201 に伴う水取跡。断面検出のみ。基本層序2区1層土を埋土とする。

S207：水田 S209 に伴う井手跡。断面検出のみ。基本層序2区3層に伴う。

S208：中世期に相当するとみられる井手跡。基本層序2区5層土を主体とする埋土。

S209：近世期に造成されたとみられる水田跡。断面検出のみ。基本層序2区3層を構成。

2区においても、試掘結果に基づき5層上位層序を重機で剥ぎ取ったため水田面の検出は出来なかったが、Fig. 8 に見られるよう調査区南側に丘陵の裾部が存在しており、斜面部分に取り付くような形態で複数の遺構が検出された。平面として検出された水取 S203・流路跡 204・井手 208 はいずれも小丘陵に沿ってプランが形成されているが、これらの軸線は水田畦畔 S104 のそれと同一であり、両者は共通の地理的要因に従っていたとみられる。

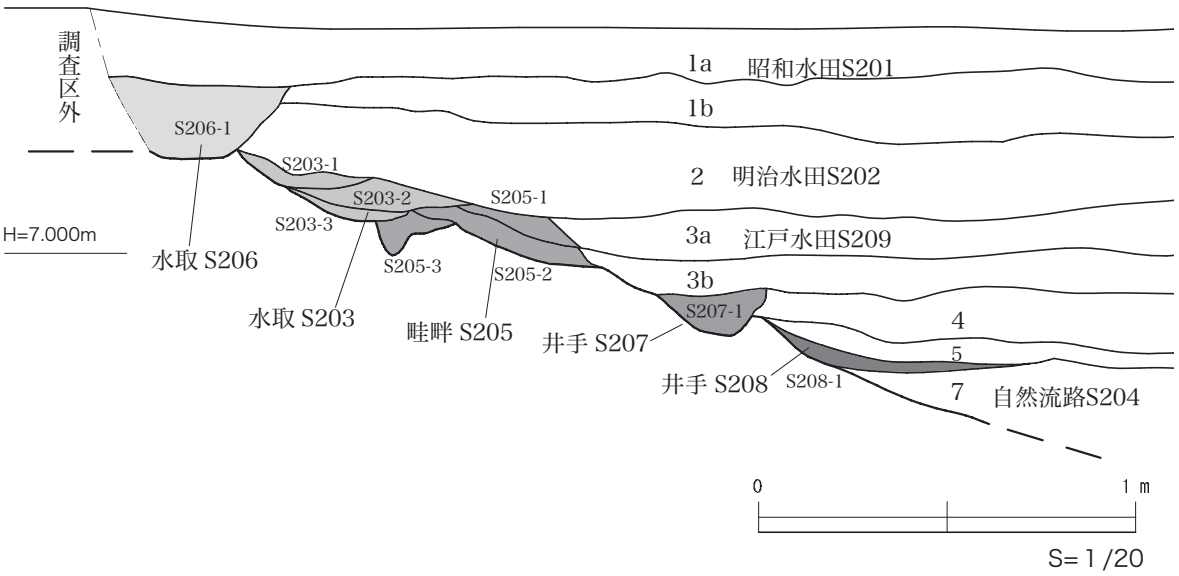
水田 S201 は現在のそれとは異なる位置に水取 S206 を有している。一部は調査区の外に出ているため詳細は明確でないが、2区東際丘陵を削平する形で田地が拡張された際に付け替えられ、水取としての役割を終えた可能性が高い。

水田 S202 は断面のみの確認である。発達したマンガン層が層序下位に形成されていた。

水取 S203 はプラン全面にローム由来シルト質土が貼り込まれており、酸化鉄層が顕著である。テラス状平坦部が二段見られる。図化されていないが、一段目と二段目を区切るように浅い小柱穴が2基存在しており、用水を遮断する施設を成していたとみられる。また検出当初は気づかなかったが、底部に酸化鉄層の沈着が顕著に見られる溝状遺構と丘陵の高所側で接していることが判明した。遺物は出土しなかったが、水田 S202 に伴うものと想定される。

S204 は自然流路跡である。5層土堆積前に埋没している。危険防止措置のため断面の一部、右岸側プランの全容および調査区北壁における断面は把握出来ていないが、流路の形成・埋没・再形成の過程が確認された。

井手 S208 は5層の直下から検出された溝状遺構で、杭木群を伴っている（Fig.11）。杭木は先端を尖らせてあったが、取り上げの際に崩れてしまい図化出来なかった。S204 完掘後に検出したためプラン西側は不分明。1区の水田畦畔 S104 と同一もしくは近接する時期の所産とみられるが、両者の間に明確な遺構は検出されなかった。



調査区西壁土層断面註記

1a 層：10YR4/2　粘質　しまりなし　シルト質土
粗砂～礫を僅かに含む　稲株を含む
酸化鉄がごく僅かに発色している
水田 S201 耕作層

1b 層：10YR4/1　粘質　ややしまる　シルト質土
粗砂～礫を僅かに含む
酸化鉄が層状に発色している
摩滅した土器片をごく僅かに伴う
水田 S201 造成層

2 層：10YR4/3　やや粘質　よくしまる　ローム由来シルト質土
礫を含む（1%）
酸化鉄・マンガンの発色が見られる
明治期染付片（型紙刷り）を伴う
水田 S202 埋土

3a 層：10YR4/3　やや粘質　よくしまる　ローム由来シルト質土
粗砂～礫を僅かに含む
酸化鉄・マンガンの発色が見られる
摩滅した土器片を僅かに伴う
水田 S209 耕作層

3b 層：3a 層と同質だがよりしまり、酸化鉄の発色は少ない
水田 S209 造成層

4 層：10YR5/1　粘質　しまる　粘土（水成堆積土由来）
粗砂～礫を僅かに含む　摩滅した土器片を僅かに伴う
酸化鉄の発色が多く見られ、マンガンは少ない

5 層：2.5Y3/1　粘質　ややしまる　粘土（水成堆積土由来）
粗砂～礫を多量に含む
土器片を伴う

7 層：10YR4/1 と 4/2 の中間　よくしまる　粘土（水成堆積土由来）
粗砂～礫を多く含む
自然流路 S204 埋土

水取 S206 註記

1：10YR4/2 粘質　しまる　シルト質土
粗砂～礫を僅かに含む
層序上位に薄い酸化鉄層が入る

水取 S203 註記

1：10YR4/3 シルト質土と 2.5Y2/1 砂質土の混土層
よくしまる
2：1 と同質だが層序の境に酸化鉄層が入る
よくしまる
3：1 と同質だが層序の境に酸化鉄層が入る
よくしまる

水田畦畔 S205 註記

1：10YR4/3　シルト質土と 2.5Y2/1 砂質土の混土層
きわめてよくしまる
2：1 と同質だが 2.5Y2/1 砂質土の割合が多い
きわめてよくしまる
3：10YR4/3 やや粘質　きわめてよくしまる　シルト質土
粗砂～礫をきわめて多く含む

井手 S207 註記

1：10YR4/3 やや粘質　ややしまる　水分を帯びる粘質土
粗砂～礫を僅かに含む
層序下位には酸化鉄の発色が顕著に見られる

井手 S208 註記

1：10YR4/1 粘質　しまりなし　粘土（水成堆積土）
均一な土質
粗砂～礫を僅かに含む
生物遺体片を伴う

Fig. 9　2区西壁遺構確認状況

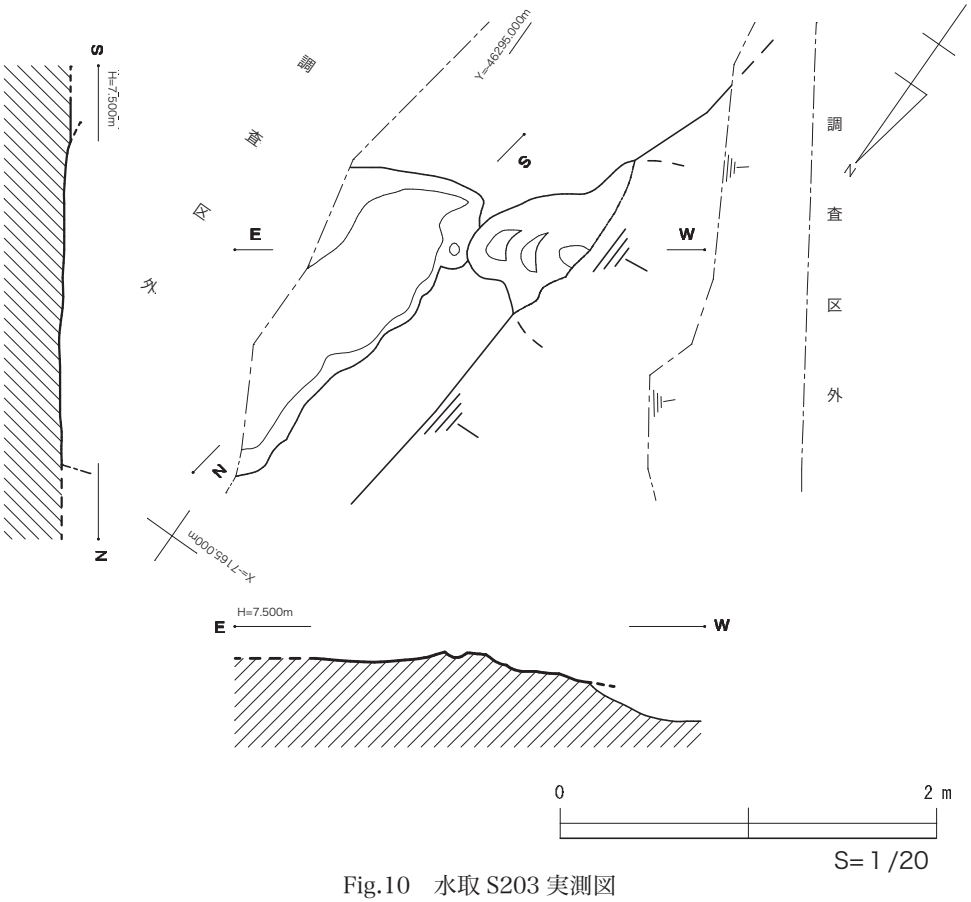


Fig.10　水取 S203 実測図

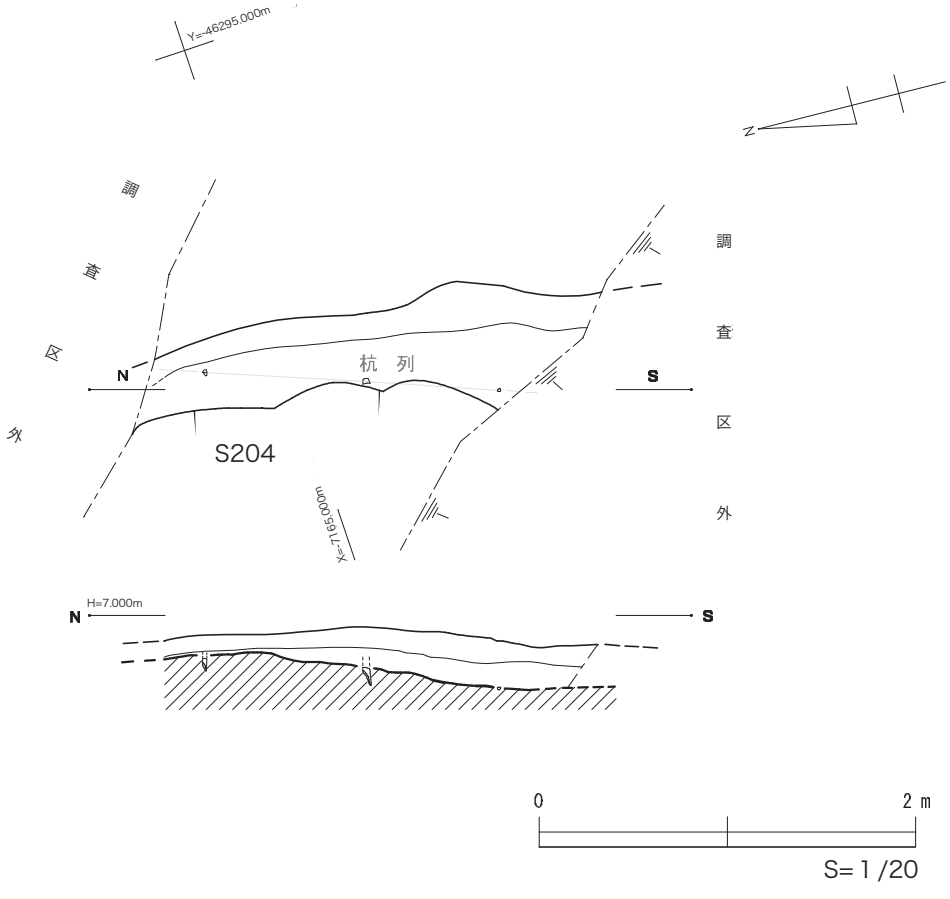


Fig.11　井手 S208 実測図

2) 遺物(Tab. 5 参照)

3層土までのローム由来シルト質土に伴う一群(3～4)と、5層土に伴う一群(5～14)とに大別される。前者は近世～近現代の染付が主で、後者からは土師器椀もしくは坏片(5)・須恵器甕片(6～8)・瓦器椀(10)のほか、弥生土器片(11～13)・縄文期の石器(14)を出土している。須恵器甕は、近在の須恵器窯跡として知られる現荒尾市所在の樺番城(万丈)窯産須恵器の特徴とは類似しない(松本健郎 1980 ほか)。9は東播系須恵器で、片口鉢の口縁部である。第II期第2段階(12世期末葉～13世期初頭)の特徴に類似する(森田稔 2004)。弥生土器は後期～終末期と推定される。

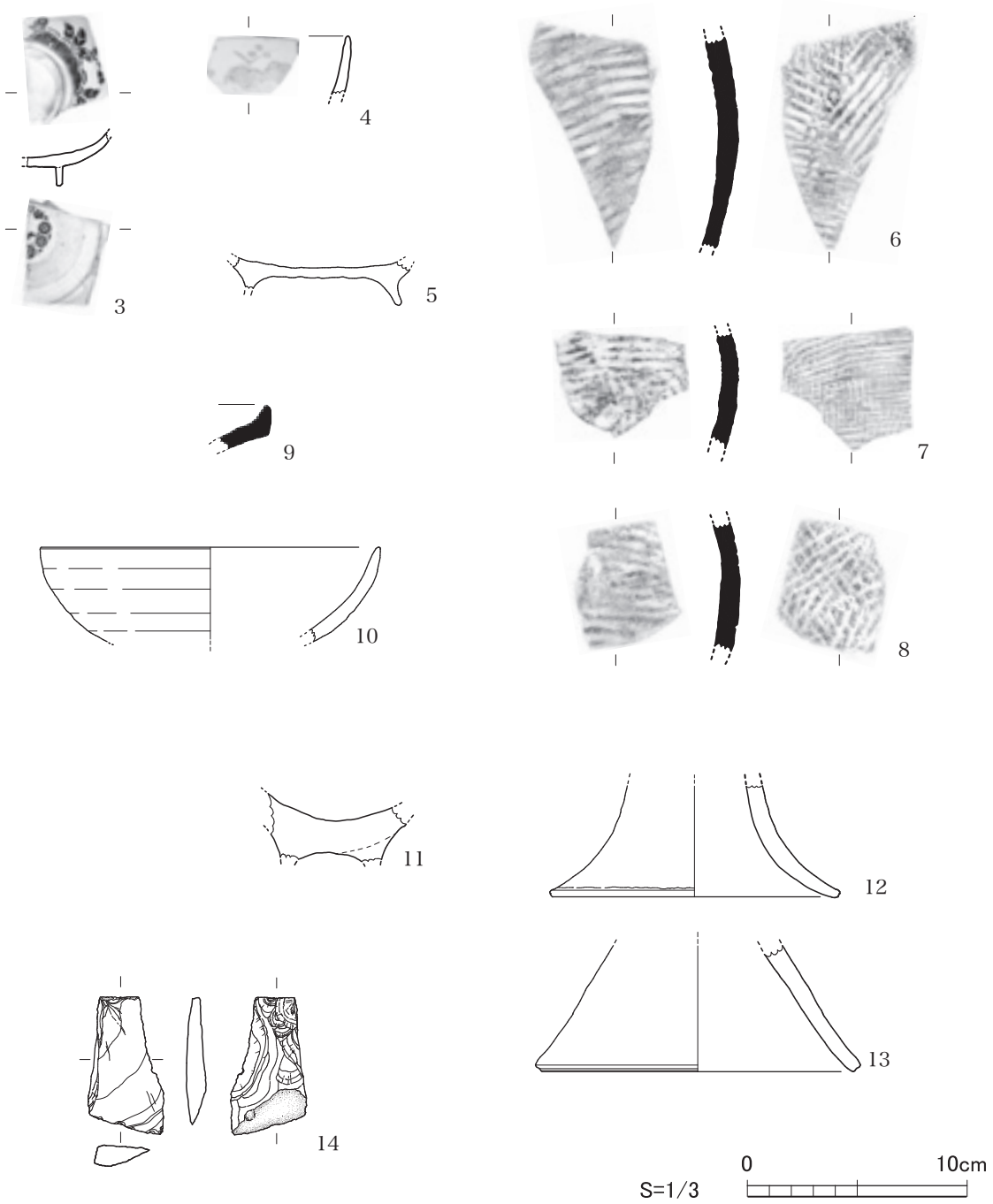


Fig.12　2区出土遺物実測図

5．3区の調査

1）遺構（Fig. 4参照）

3基の遺構が確認された。

S301：昭和後半期に造成され、現在まで継続利用されている水田。基本土層3区1層を構成する。

S302：谷状自然地形の痕跡。基本層序3区3層土を埋土とする。

S303：水田S301下位から検出された小水田。基本層序3区2層を構成。

水田S301は客土されたローム由来シルト質土によって形成される。下位層序との境目は自然地形を無視しており、重機による削平が想定される。

谷S302は自然地形とみられるが、埋土は上面の遺物包含層と下面の無遺物層とに大別され、間には起伏の激しい酸化鉄層が分布している。包含された遺物の大半は摩滅が著しく、流れ込んでいるか激しい撹乱を受けた可能性が高い。前者で何らかの耕作が行われていた可能性を示唆し得る。

水田S303は方形に分布する酸化鉄層である。酸化鉄層は約10cmと比較的厚く、よくしまる。一部は調査区外に拡がり全体の形状を把握し得なかったが、分布が谷S302の内側に納まっていること、北側に浅い溝状のプランを伴っていることから、水取を伴う小水田の痕跡であると判断した。時期を特定し得る遺物は認められなかったが、中世期の遺物を包含する谷S302埋没後に形成されていることから近世期の所産とみられる。

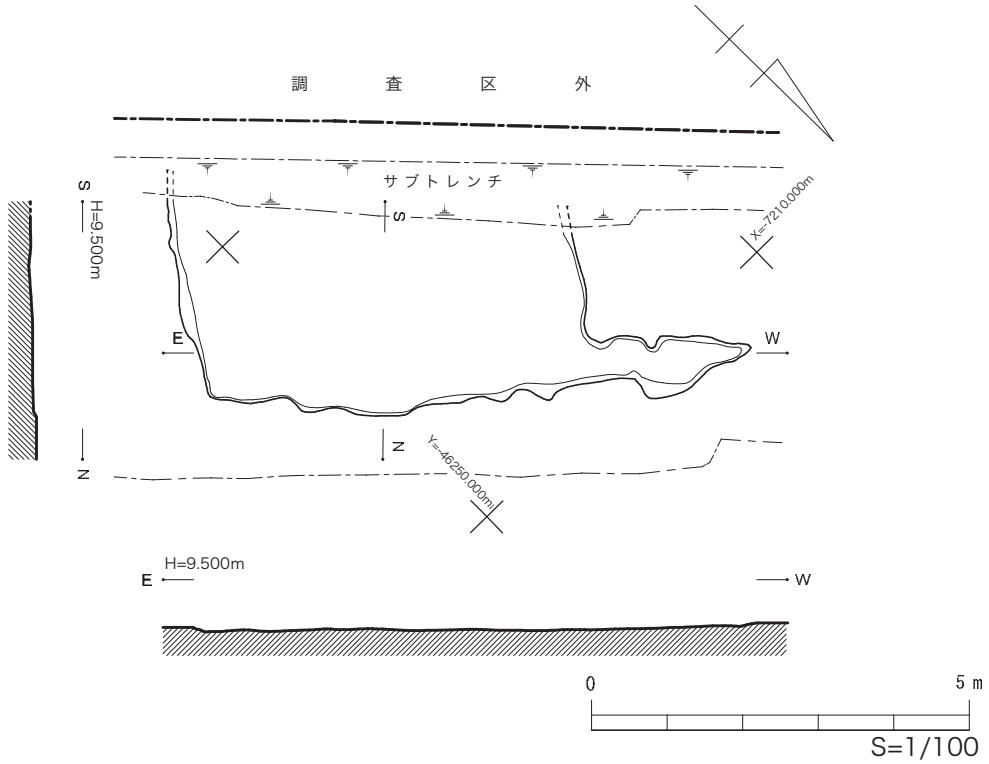
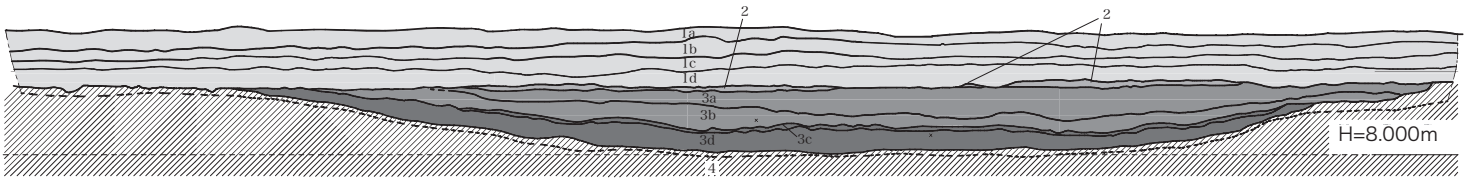


Fig.14　水田S303実測図



1a 層：10YR3/2　やや粘質　しまりなし　シルト質土（ローム由来）
粗砂～礫を含む
S301 耕作層
1b 層：10YR4/3　やや粘質　しまる　シルト質土 (ローム由来)
酸化鉄の発色が全体に、マンガンの層状発色（3cm 程度）が一部に見られる
S301 基盤層
1c 層：10YR5/3　やや粘質　よくしまる　粘土（水成堆積土由来）
不均一な土質
酸化鉄・マンガンの発色が全体に見られる
S301 造成層
1d 層：10YR5/3　1c と同質だがよりしまる

2 層：10YR4/3　粘質　きわめてよくしまる　粘土（水成堆積土由来）
摩滅した土器細片・5cm 大の礫を僅かに伴う
酸化鉄が結合するほど発達し、マンガンの発色も見られる
S303 埋土
3a 層：2.5Y4/1　粘質　よくしまる　粘土
粗砂～礫を多く含む　摩滅した土器細片を伴う
酸化鉄は手で触っても判るほどに発達している
マンガンは全体にうっすらと認められる（粒状発色）
3b 層：2.5Y4/1 と 3/1 の中間
粘質　しまる　粘土
粗砂～礫を多く含む　摩滅した土器細片を伴う
酸化鉄・マンガンは粒状に発色している

3c 層：2.5Y4/3　ややしまる　酸化鉄層
3d 層：2.5Y2/1　粘質　しまりなし　粘土
均一な土質
無遺物層
4 層：2.5Y6/3　粘質　よくしまる　粘土（花崗岩由来）
花崗岩由来の礫粒を多量に含む
一部に酸化鉄の発色が見られる（層状発色）

Fig.15　３区西壁土層断面図

２）遺物(Tab. 5 参照)

２区に比して土師器皿が多く、須恵器甕が少ないという差異が認められた。土師器（15 ～ 22）は復元直径７cm 代後半の小皿が主で、熊本県北～中央部土師器編年 11 期(13 世紀末～ 14 世紀初頭)の特徴に類似する(美濃口雅朗 1994)。瓦器椀（23・24）は軟質で、生産地がそれほど遠くではない可能性を示唆できる。25 は瓦質擂鉢、26 は火鉢である。27・28 は須恵器椀もしくは坏とみられる。須恵器甕（29・30）の特徴は２区と共通している。輸入陶磁器と目される個体はいずれも太宰府編年龍泉系青磁 F 期(13 世紀中頃～ 14 世紀初頭、31)・G 期（14 世紀初頭～ 14 世紀後半、32）の特徴に類似しており（山本 2000)、染付・色絵は伴っていない。

当遺跡において唯一台地上に立地した調査区である。地山は低位段丘層（岱明層）に相当する。

S401：昭和後半期に造成された水田。平成 20 年時点で竹林化している（玉名市都市計画図による)。

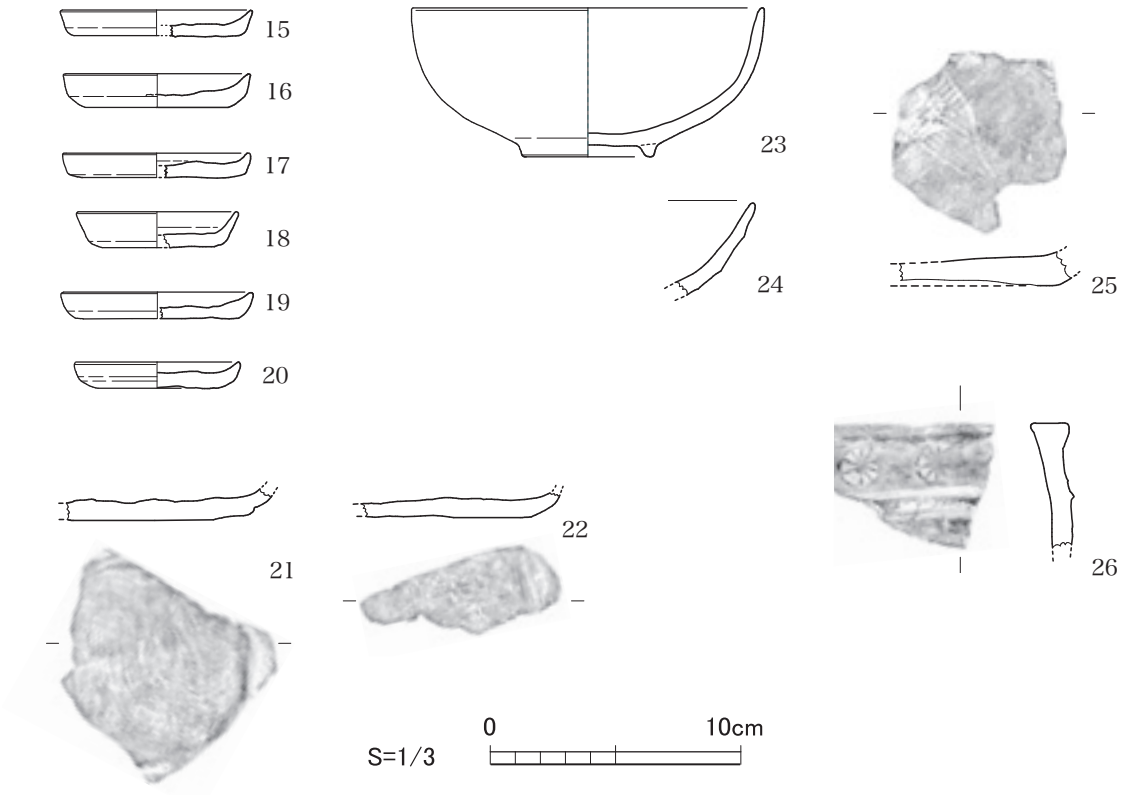


Fig.16　３区出土遺物実測図 1

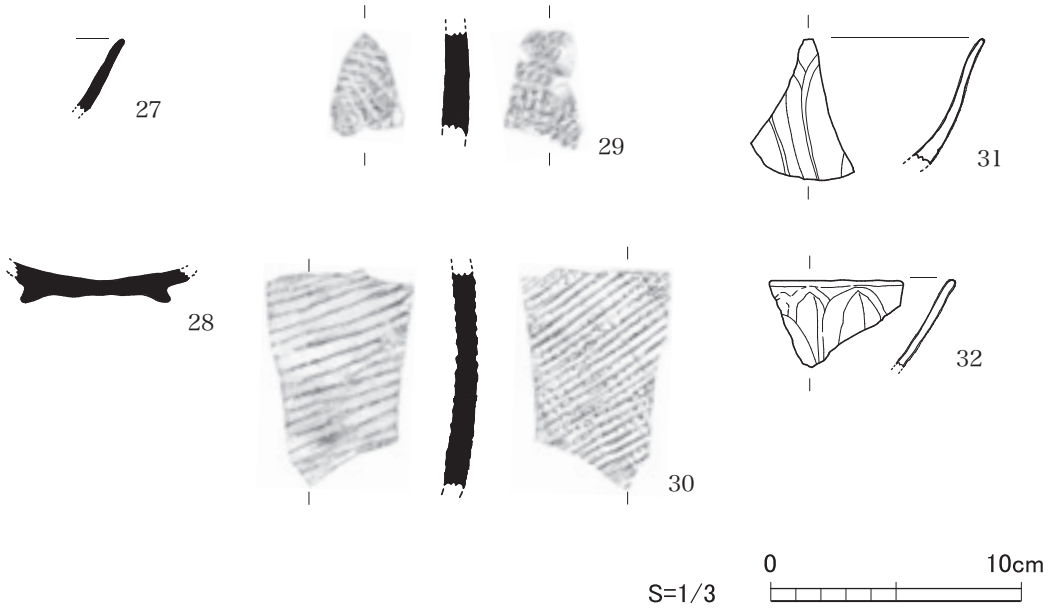


Fig.17　3区出土遺物実測図2

6．4区の調査

1）遺構（Fig.19 ～ 22 参照）

基本層序4区1層土を埋土とする。

S402：道路状遺構。プラン底部が硬化する。基本層序4区2層土を主体とする埋土。

S403・404・406・408：当初は別遺構としていたが精査の結果同一遺構とした。大半が調査区外に拡がるとみられ形状及び用途は不明。S403 に統合。基本層序4区2層・3層を埋土とする。

S405：昭和後半期の溝状遺構。用途不明。埋土は基本層序4区1層土を主体とする。

S407：正体不明遺構。大半が調査区外に拡がるとみられ全体の形状は不明。道路状遺構 S402 の一部である可能性もある。基本層序4区2層土を埋土に持つ。

S416：基本層序4区2層土を埋土に持つピット。人為的掘削の可能性が高いものの用途は不明。

S419：道路状遺構 S402 を切るピット。人為的掘削の可能性が高いものの用途は不明。埋土は基本層序4区1層土。

S420：正体不明遺構 S407 のプラン内から検出されたピット。人為的掘削によるものとみられるが、S407 との新旧関係及び用途は不明。埋土は基本層序4区2層土。

S421：正体不明遺構 S403 のプラン内から検出されたピット。詳細不明。埋土は基本層序4区1層土。

S424：正体不明遺構 S403 を切るピット。埋土は基本層序4区1層土。

S425：正体不明遺構 S403 に切られるピット。埋土は基本層序4区2層土。

S426：正体不明遺構 S403 を切るピット。埋土は基本層序4区1層土。

S427：正体不明遺構 S403 を切るピット。埋土は基本層序4区1層土。

S428：南側拡張部から検出されたピット。正体不明遺構 S403 と重なる。プランは明瞭で人為的掘削の可能性が高いものの、S403 との新旧関係は不明。埋土は基本層序4区2層土。

4区の遺物は細片が多く、実測に堪え得る個体は少なかった。33 や 35 などの特徴から近世後半～近代が主たる年代になるものとみられる。

2）遺物(Tab. 5 参照)

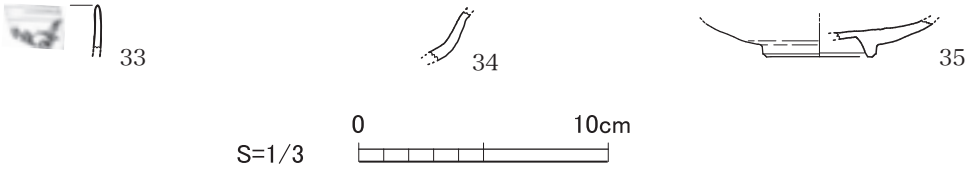


Fig.18　4区出土遺物実測図

参考文献

熊本県文化財調査報告第48集「生産遺跡基本調査報告集II」(熊本県教育委員会、1980)
熊本県文化財調査報告第210集「立願寺大塚遺跡」(熊本県教育委員会、2003)
熊本県文化財調査報告第219集「群前遺跡」(熊本県教育委員会、2003)
熊本県文化財調査報告第225集「前田遺跡」(熊本県教育委員会、2004)
熊本県文化財調査報告第275集「吉丸西遺跡」(熊本県教育委員会、2012)
熊本県文化財調査報告第283集「築地館跡」(熊本県教育委員会、2013)
玉名市文化財調査報告第19集「両迫間日渡遺跡」(玉名市教育委員会、2009)
玉名市文化財調査報告第23集「浮田溜池関連施設」(玉名市教育委員会、2010)
玉名市立歴史博物館こころピア資料集成第５集「伊倉城跡」(玉名市立歴史博物館こころピア、2003)
岱明町文化財調査報告第１集「玉名平野条里跡(下河原地区)」(岱明町教育委員会、2004)
太宰府市の文化財　第49集「太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—」(太宰府市教育委員会、2000)
『中近世土器の基礎研究X　回転台土師器の諸様相』(日本中世土器研究会、1994)
『荒尾市史　前近代資史料集』(荒尾市、2008)
吉岡康暢『中世須恵器の研究』(吉川弘文館、1994)
『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会、2000)
中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』(真陽社、2004)
『世界陶磁全集　3　日本中世』(小学館、1977)

Tab. 4　古閑野田遺跡出土遺物観察表１（石器・石製品）

掲載番号	調査区	出土位置	器 種	石 材	サ イ ズ(cm)			重量(g)	備　考
					全長	全幅	全厚		
2	1区	3b層～4層	剥片	黒曜石(腰岳産)	3.6	2.8	0.6	6.0	使用痕あり
14	2区	西壁際サブトレンチー括	剥片	サヌカイト(多久産)	6.7	3.7	1.1	23.0	使用痕あり、一部に自然面を残す

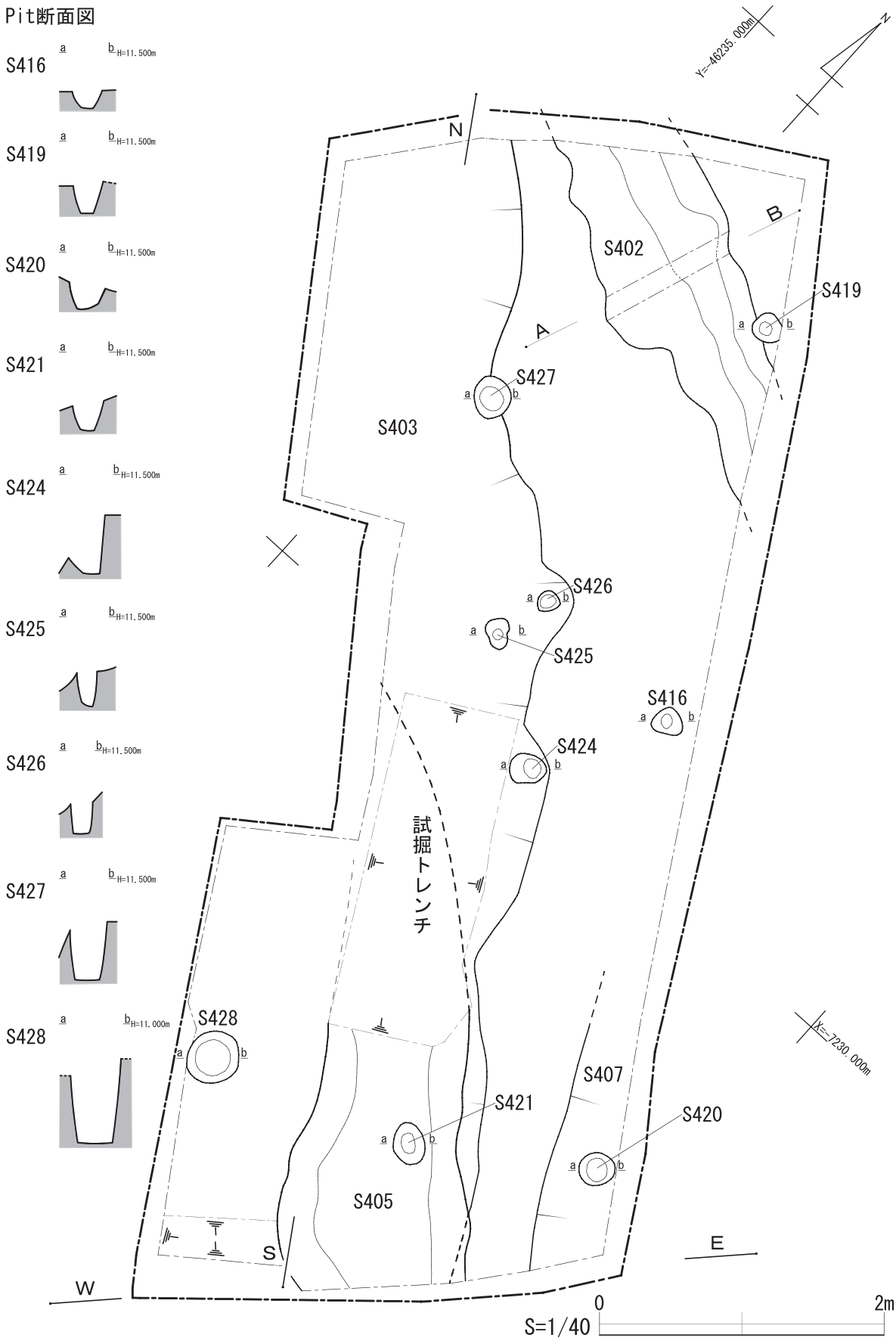
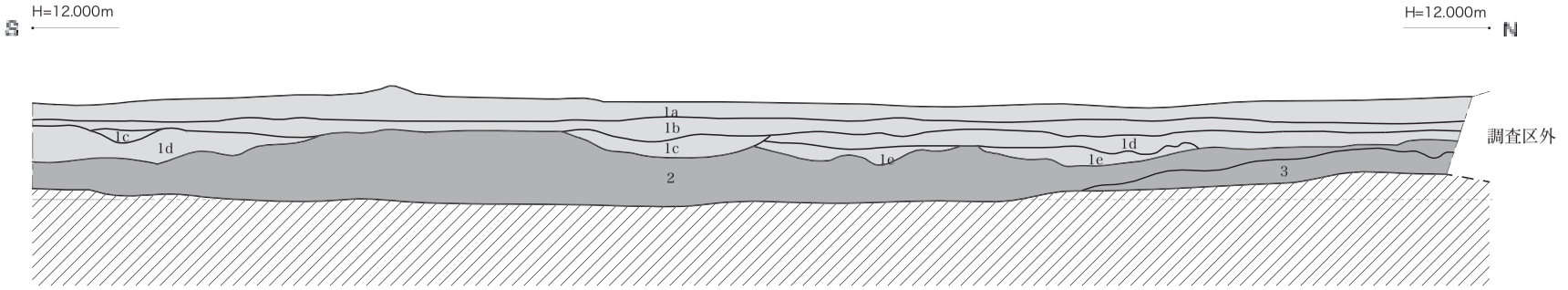


Fig.19　4区遺構実測図



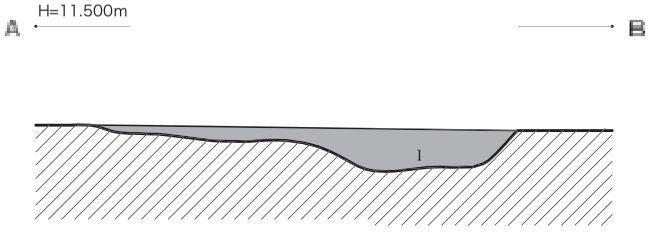
1a：10YR3/4　やや粘質　ややしまる　シルト質土　S401 耕作層
粗砂～礫を多く含む　樹根多い
1b：1a と同質だがよりしまりが強く不均一な土質　S401 基盤層
1c：10YR2/2　僅かに粘質　ややしまる　シルト質土　S405 埋土
きわめて不均一な土質
酸化鉄が塊状に発色する

1d：10YR3/4　やや粘質　よくしまる　シルト質土　S401 造成層
粗砂～礫を僅かに含む　炭化物粒（1mm 以下）を僅かに含む
マンガンの発色が見られる
1e：1d と同質だがしまり及び混入物はより少ない　S401 造成層

2:10YR3/4　やや粘質　ややしまる　シルト質土　S403 上層埋土
粗砂～礫を含む（2%）
摩滅した土器細片を僅かに伴う
3：10YR2/3　やや粘質　ややしまる　シルト質土　S403 下層埋土
均一な土質

0　2m
S=1/40

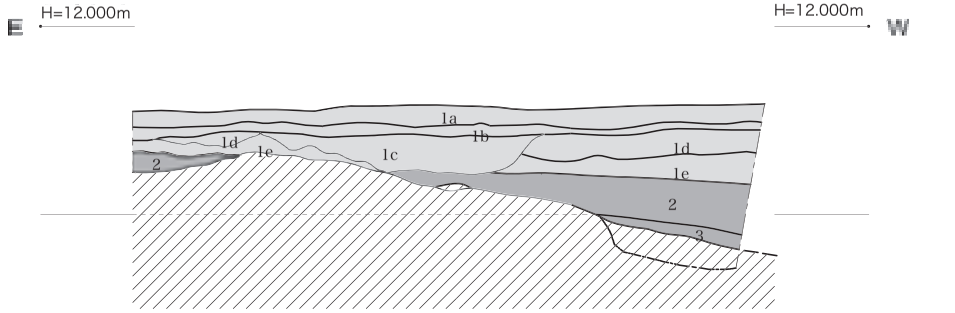
Fig.20　4 区西壁土層断面図



1：　10YR3/4　やや粘質　ややしまる　シルト質土
粗砂～礫を含む（2%）
摩滅した土器細片を僅かに伴う
層序下位はよりしまる

0　1m
S=1/20

Fig.22　道路状遺構 S402 土層断面図



1a：10YR3/4　やや粘質　ややしまる　シルト質土
粗砂～礫を多く含む　樹根多い
1b：1a と同質だがよりしまりが強く不均一な土質
1c：10YR2/2　僅かに粘質　ややしまる　シルト質土
きわめて不均一な土質
酸化鉄が塊状に発色する

1d：10YR3/4　やや粘質　よくしまる　シルト質土
粗砂～礫を僅かに含む　炭化物粒（1mm 以下）を僅かに含む
マンガンの発色が見られる
1e：1d と同質だがしまり及び混入物はより少ない

2:10YR3/4　やや粘質　ややしまる　シルト質土
粗砂～礫を含む（2%）
摩滅した土器細片を僅かに伴う
3：10YR2/3　やや粘質　ややしまる　シルト質土
均一な土質

0　2m
S=1/40

Fig.21　4 区南壁土層断面図

Tab. 5　古閑野田遺跡出土遺物観察表２（土器・陶磁器）

掲載番号	調査区	出土位置	器種	部位	サイズ(cm)			成形・調整		胎土	色調		備考
					口径	底径	器高	内面	外面		内面	外面	
1	1区	S104No.1	白磁小皿	口縁～底	(9.3)	(5.6)	2.9	口禿げ、見込外縁片刃切込	体部下～底部無釉		10Y7/1	7.5Y7/1	釉はやや青みがかる
3	2区	西壁際サブトレンチ2層土	染付椀	底	－	－	2.4	蛇の目釉剥ぎ	高台削り出し		7.5Y8/1	7.5Y8/1	型紙刷り印判手、明治期
4	2区	壁削り一括（西壁）	染付椀	口縁	－	－	2.7	文様なし	染付文様やや不明瞭		10Y8/1	10Y8/1	いわゆるくらわんか椀
5	2区	黒色土層中	土師器椀	底	－	7.0	2.0	不明	高台貼り付け	白色微粒子・結晶状微粒子	2.5Y8/2	5Y4/1	
6	2区	西壁際サブトレンチ黒色土	須恵器甕	胴	－	－	9.8	平行文	綾杉状平行文	白色微粒子	10YR5/1	10YR5/2	
7	2区	5a層一括	須恵器甕	胴	－	－	5.4	一部重複する平行文	格子状に重複する平行文	ごく僅かな白色微粒子	N6/0	N7/0	外面一部に自然釉
8	2区	5a層一括	須恵器甕	胴	－	－	6.0	平行文	重複する平行文	ごく僅かな白色微粒子	2.5Y6/1	N7/0	タタキ痕は浅め
9	2区	5a層	須恵器片口鉢	口縁	－	－	2.1	口唇に強いナデ痕	口唇部黒変	白色微粒子	N7/0	N4/0(黒変)	東播系
10	2区	5a層～5b層丘の裾部	瓦器椀	口縁～体	(15.8)	－	4.4	不明	ケズリ？	白色微粒子・粗砂～礫	5Y8/1	N4/0(口縁)	焼成不良
11	2区	西壁際サブトレンチ一括	弥生甕	底	－	－	2.9	不明	不明	石英・長石	2.5Y6/2	2.5Y6/2	後期か？
12	2区	5b層	弥生器台？	脚	－	(13.6)	5.1	不明	不明	石英・長石	2.5Y8/1	2.5Y8/1	
13	2区	流路裾部（S204）5b層	弥生甕？	脚	－	(15.1)	6.4	不明	不明	石英・長石・褐色粒	2.5Y8/1	2.5Y8/2	野辺田系甕の脚か？
15	3区	S303完掘時	土師器小皿	口縁～底	(7.8)	(6.8)	1.1	不明	糸切り	結晶状微粒子・白色微粒子	2.5Y7/4	2.5Y7/4	
16	3区	東壁トレンチ	土師器小皿	口縁～底	(7.6)	(6.0)	1.4	見込ナデB類？	糸切り	白色微粒子・結晶状微粒子	7.5YR6/6	7.5YR6/6	
17	3区	S302/3a層	土師器小皿	口縁～底	(7.6)	(7.2)	1.0	見込ナデB類？	糸切り	白色微粒子・結晶状微粒子	7.5YR6/6	7.5YR6/6	
18	3区	S302/3a層	土師器小皿	口縁～底	(6.6)	(5.4)	1.5	見込ナデC類？	糸切り	結晶状微粒子・白色微粒子	2.5Y7/4	2.5Y7/4	
19	3区	S302/3a層	土師器小皿	口縁～底	(7.8)	(6.6)	1.1	不明	糸切り	白色微粒子・結晶状微粒子	7.5YR6/6	10YR7/4	
20	3区	3層一括	土師器小皿	口縁～底	(6.8)	(5.0)	1.1	不明	糸切り	白色微粒子・結晶状微粒子	7.5YR6/6	7.5YR6/6	
21	3区	S302/3a層	土師器坏	底	－	－	1.3	不明	糸切り	金属光微粒子・結晶状微粒子	5YR6/6	5YR6/6	
22	3区	S303完掘時	土師器坏	底	－	－	1.0	不明	糸切り	白色微粒子・金属光微粒子	10YR6/4	10YR6/3	
23	3区	S302/3a層	瓦器椀	口縁～底	(14.4)	(5.4)	6.1	不明	高台貼り付け	ごく僅かな白色微粒子	2.5Y8/1	2.5Y8/1	
24	3区	S302/3b層	瓦器椀	口縁	－	－	3.0	不明	ケズリ？	鉄分がごく僅かに融出	5Y6/1	N5/0(口唇)	焼成やや不良
25	3区	西壁際サブトレンチ	瓦器擂鉢	底	－	－	1.4	刷毛描き摺目	剥落のため不明	ごく薄い層状	7.5Y4/1	7.5Y4/1	
26	3区	表土剥ぎ	瓦器火鉢	口縁	－	－	5.1	ケズリ	ケズリ後押形文	白色微粒子、結晶状微粒子	10YR5/2	10YR4/1	
27	3区	東壁トレンチ一括	須恵器椀or坏	口縁	－	－	3.1	不明	不明	鉄分がごく僅かに融出	10YR5/2	10YR5/2	焼成良好
28	3区	S302/3a層	須恵器椀or坏	底	－	6.5	1.7	不明	高台貼り付け	白色微粒子	5Y8/1	5Y7/1	焼成不良
29	3区	S303一括北半部	須恵器甕	胴	－	－	4.3	重複する平行文	重複する平行文		2.5Y6/1	N7/0	焼成やや不良
30	3区	S302/3b層	須恵器甕	胴	－	－	8.9	斜位平行文	格子状に重複する平行文	白色微粒子	10YR7/2	5Y6/1	一部に自然釉あり
31	3区	S302/3a層	青磁椀	口縁～体	－	－	5.1	施釉	施釉、鎬蓮弁文		10Y6/2	10Y6/2	蓮弁の輪郭明瞭
32	3区	3層一括	青磁椀	口縁	－	－	3.5	施釉	施釉、鎬蓮弁文		5Y6/2	7.5Y6/1	文様の輪郭不明瞭
33	4区	拡張部分一括	染付椀	口縁	－	－	1.8	二重圏線	二重圏線・草花文？		7.5Y8/1	7.5Y8/1	伊万里系
34	4区	S405	陶器小鉢	体	－	－	2.0	施釉	施釉、中央に白釉圏線		2.5Y7/3	2.5Y7/3	
35	4区	拡張部分1b～1c層	陶器椀	底	－	(4.4)	1.4	施釉後蛇の目釉剥ぎ	高台削り出し		2.5Y5/3(釉)	2.5Y7/2(胎)	

(数値)は反転復元を示す。

IV. 自然化学分析

古閑野田遺跡における花粉分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は、１区の 3a 層と５層、２区の 5a 層と 7b 層、および３区の 3b 層と 3d 層から採取された計６点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から 1 cm^3 を秤量
２）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて 15 分間湯煎
３）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
４）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
６）再び氷酢酸を加えて水洗処理
７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 22、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉 29、シダ植物胞子２形態の計 56 である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表１に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、モチノキ属、ブドウ属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ノアズキ属、ツリフネソウ属、ヤブカラシ、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、キツネノマゴ、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1）1区

下位の5層では、樹木花粉の占める割合が73%と高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属とシイ属－マテバシイ属が優勢で、コナラ属コナラ亜属、クリ、マツ属複維管束亜属などが伴われる。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属、オモダカ属などが認められた。3a層では、草本花粉の占める割合が64%、樹木花粉が31%である。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科、オモダカ属、ミズアオイ属、ソバ属などが伴われる。樹木花粉では、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が優勢で、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。

2）2区

下位の7b層では、草本花粉の占める割合が96%と高い。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科が優勢で、セリ亜科、キク亜科、カラマツソウ属などが伴われる。5a層では、草本花粉の占める割合が55%、樹木花粉が43%である。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科が優勢で、ヨモギ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属が優勢で、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、クリなどが伴われる。

3）3区

下位の3d層では、草本花粉の占める割合が53%、樹木花粉が44%である。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、カヤツリグサ科が優勢で、ヨモギ属、ガマ属－ミクリ属、セリ亜科、キク亜科、オモダカ属、ミズアオイ属などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属が優勢で、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。3b層では、草本花粉の占める割合が65%、樹木花粉が26%である。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が増加し、カヤツリグサ科、ガマ属－ミクリ属は減少している。また、ソバ属が出現している。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属がやや減少している。

５．花粉分析から推定される植生と環境

（１）１区

中世遺物包含層より下位の５層の堆積当時は、周辺にカシ類（コナラ属アカガシ亜属）やシイ類（シイ属－マテバシイ属）などの照葉樹林を主体として、二次林要素のナラ類（コナラ属コナラ亜属）、クリ、マツ類（アカマツ・クロマツ等）なども見られる森林植生が分布していたと推定される。また、少量ながらイネ属型の花粉が検出され、水田雑草でもあるカヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属が伴われることから、周辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられる。

近世水田造成面より下位の 3a 層では、調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていたと考えられ、部分的にソバ属、アブラナ科などを栽培する畑作も行われていたと推定される。アブラナ科には、アブラナ（ナタネ）、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれる。また、遺跡周辺にはカシ類、シイ類などの照葉樹林を主体として、二次林要素のナラ類やマツ類なども生育する森林植生が分布していたと考えられる。

（２）２区

中世遺物包含層より下位の 7b 層の堆積当時は、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などの草本類を主体としてセリ亜科、アブラナ科、イボクサなども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺には森林植生はあまり分布していなかったと推定される。

中世遺物包含層の 5a 層では、イネ属型の花粉が検出され、水田雑草でもあるカヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属が伴われることから、調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていたと考えられる。また、遺跡周辺にはカシ類、シイ類などの照葉樹林を主体として、二次林要素のナラ類、クリ、マツ類なども見られる森林植生が分布していたと推定される。

（３）３区

中世遺物包含層より下位の 3d 層では、イネ属型の花粉が検出され、水田雑草でもあるカヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属が伴われることから、調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていたと考えられる。また、遺跡周辺にはカシ類、シイ類などの照葉樹林を主体として、二次林要素のナラ類、マツ類なども見られる森林植生が分布していたと推定される。

中世遺物包含層の 3b 層では、周辺で水田域が拡大したと考えられ、部分的にソバ属などを栽培する畑作も行われていたと推定される。また、遺跡周辺ではカシ類、シイ類などの照葉樹林がやや減少したと考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として . 第四紀研究 ,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

表１　古閑野田遺跡における花粉分析結果

分類群		１区		２区		３区	
学名	和名	３a層	５層	５a層	７b層	３b層	３d層
Arboreal pollen	樹木花粉						
Abies	モミ属		1	1		1	3
Tsuga	ツガ属	1		2		1	3
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	14	6	16		12	25
Cryptomeria japonica	スギ		2	2		2	4
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科–イヌガヤ科–ヒノキ科						1
Salix	ヤナギ属				2		
Juglans	クルミ属						1
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	2					1
Alnus	ハンノキ属		1	1	1		
Betula	カバノキ属	2	2	4	1	3	1
Corylus	ハシバミ属	4	2	5		3	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属–アサダ	2				1	3
Castanea crenata	クリ		13	7	1	5	6
Castanopsis-Pasania	シイ属–マテバシイ属	47	118	64		41	87
Fagus	ブナ属			1			
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	7	20	9	2	7	13
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	34	149	114		75	160
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属–ケヤキ	1	1	3	2		
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属–ムクノキ	1	1	3			2
Ilex	モチノキ属		1				
Vitis	ブドウ属			1		1	
Distylium	イスノキ属		1	1			
Arboreal･Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科–イラクサ科	3		2	1	8	3
Rosaceae	バラ科			1			
Leguminosae	マメ科					4	3
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Typha-Sparganium	ガマ属–ミクリ属			1		7	26
Sagittaria	オモダカ属	1	2	1		4	2
Gramineae	イネ科	129	27	94	88	182	97
Oryza type	イネ属型	28	4	50		19	27
Cyperaceae	カヤツリグサ科	26	13	101	53	44	116
Aneilema keisak	イボクサ		1		1		
Monochoria	ミズアオイ属	1	1	1		1	1
Allium	ネギ属				1	1	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1		2	1
Rumex	ギシギシ属					1	
Fagopyrum	ソバ属	1				1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科–ヒユ科	1		1		7	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	3					
Ranunculus	キンポウゲ属			1		1	
Thalictrum	カラマツソウ属				9		
Cruciferae	アブラナ科	7	1	3		1	3
Sanguisorba	ワレモコウ属				1		
Dunbaria	ノアズキ属			1			
Impatiens	ツリフネソウ属				1		
Cayratia japonica	ヤブガラシ		1				
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属–フサモ属	1					
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			1		2	
Apioideae	セリ亜科			2	13	11	18
Labiatae	シソ科	1					
Justicia procumbens	キツネノマゴ	1					
Lactucoideae	タンポポ亜科	1		2	1	1	6
Asteroideae	キク亜科	8		4	9	4	13
Xanthium	オナモミ属	1				1	
Artemisia	ヨモギ属	27	5	36	168	83	66
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	7	31	6	2	6	
Trilate type spore	三条溝胞子	6	29	6	1	32	15
Arboreal pollen	樹木花粉	115	318	234	9	152	311
Arboreal･Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3		3	1	12	6
Nonarboreal pollen	草本花粉	237	55	300	345	373	377
Total pollen	花粉総数	355	373	537	355	537	694
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	5.3	1.1	3.0	3.8	2.0	5.9
		$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	3	15	6	9	8	17

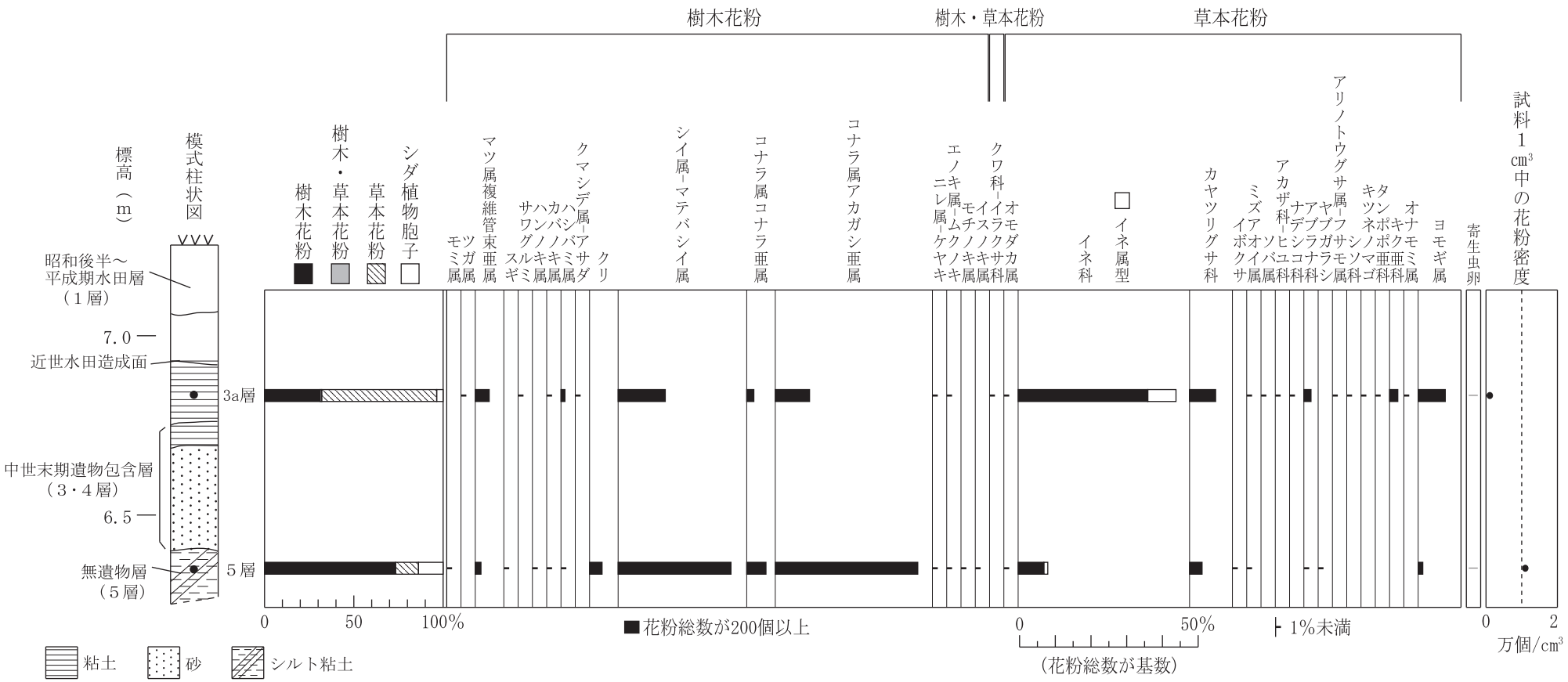


図１　古閑野田遺跡１区における花粉ダイアグラム

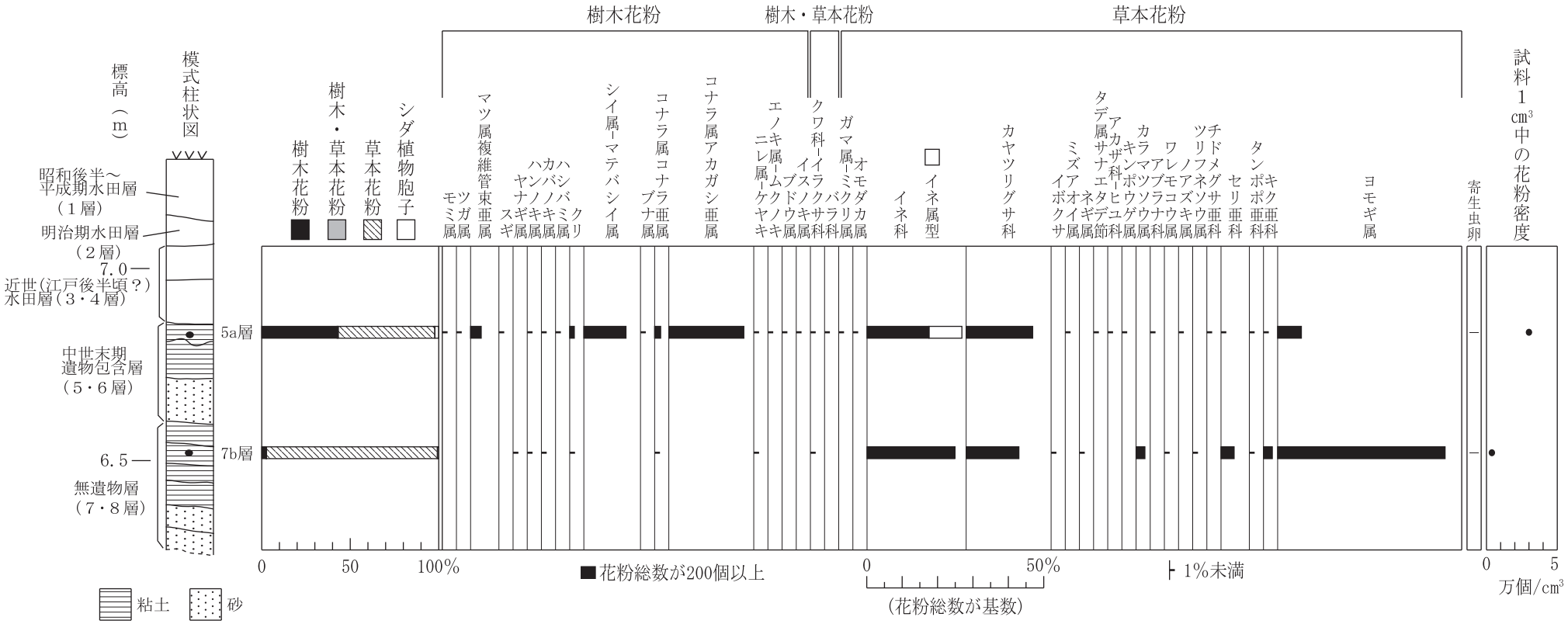


図２　古閑野田遺跡２区における花粉ダイアグラム

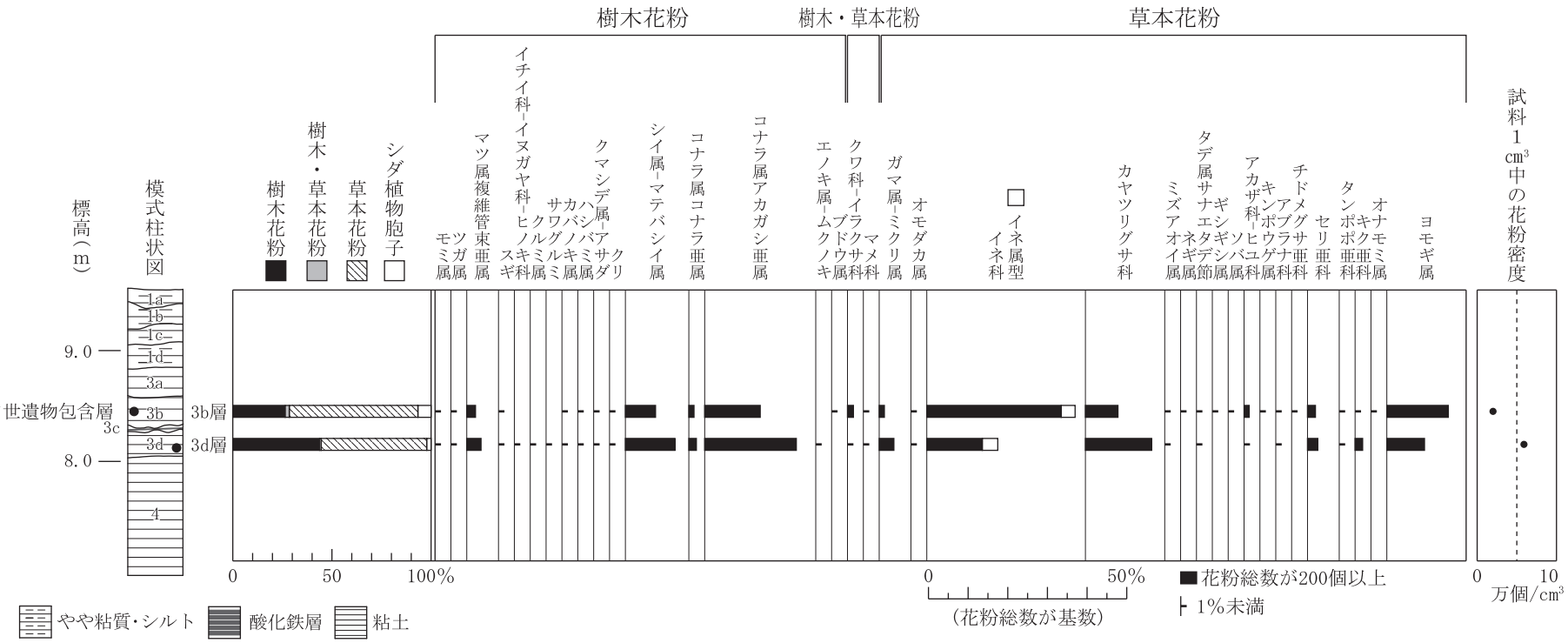


図３　古閑野田遺跡３区における花粉ダイアグラム

古閑野田遺跡の花粉・胞子

1　マツ属複維管束亜属　（1区　５層）

2　ハシバミ属
（2区　５a層）

3　シイ属－マテバシイ属
（2区　５a層）

4 コナラ属コナラ亜属
（1区　５層）

5　コナラ属アカガシ亜属
（1区　３a層）

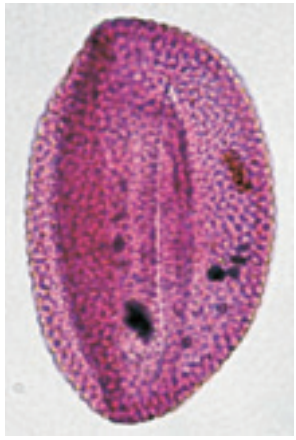
6　ブドウ属　（1区　３a層）

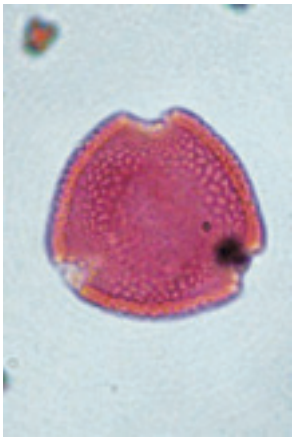
7　オモダカ属　（2区　５a層）

8　イネ科　（1区　３a層）

9　イネ属型　（1区　５層）

10　カヤツリグサ科
（2区　５a層）


11　ソバ属　（1区　５層）


12　ノアズキ属　（2区　５a層）

13　アブラナ科　（2区　５a層）

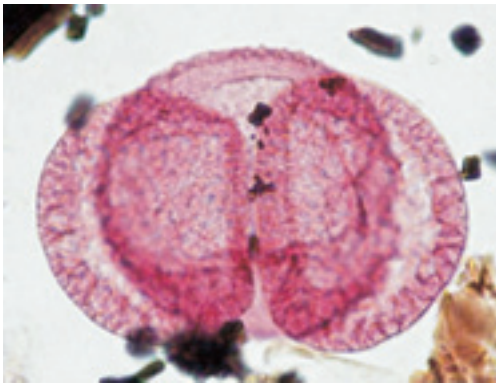
14　ヨモギ属　（2区　７b層）

15　シダ植物単条溝胞子
（1区　５層）

16　シダ植物三条溝胞子
（1区　３a層）

10μm

古閑野田遺跡（３区）の花粉・胞子



1　マツ属複維管束亜属（3d層）

2　スギ（3b層）

3　シイ属−マテバシイ属（3b層）

4　コナラ属アカガシ亜属（3b層）

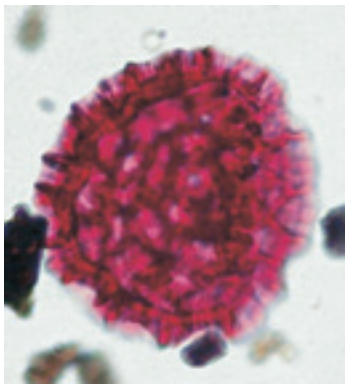
5　ガマ属−ミクリ属（3b層）

6　オモダカ属（3b層）

7　イネ科（3b層）

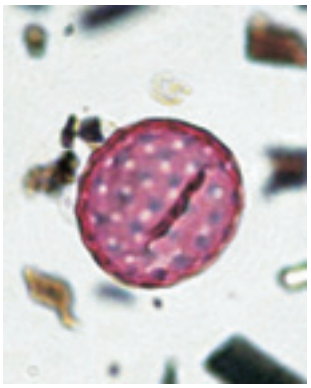
8　イネ属型（3b層）

9　カヤツリグサ科（3b層）



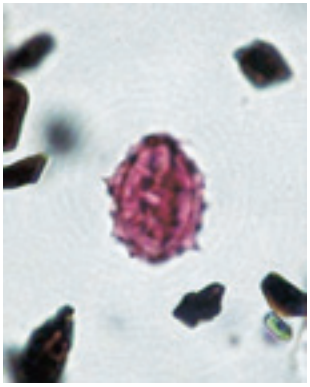
10　タデ属サナエタデ節（3b層）

11　ソバ属（3b層）



12　アカザ科−ヒユ科（3b層）

13　セリ亜科（3d層）



14　キク亜科（3b層）

15　ヨモギ属（3b層）

16　シダ植物三条溝胞子（3b層）

10 μm

V. 総括

今回の調査における成果としては、遺跡周辺における土地利用状況の変遷を確認出来た点が挙げられる。すなわち、カシ類・シイ類などに占められる微高地、ヨモギ属・カヤツリグサ科など草木類が繁茂する低地、及び低位段丘上の森林という原風景から、開発による田地化・畠地化への急速な進展が見られるという点である。

中世段階における水田は湿田とみられ、自然地形の影響を顕著に受けている。近世期における水田もおそらく初期段階では限定的かつ小区画だったとみられるが、おなじく後期段階に至り大規模な土木工事が実施され、溜池灌漑による水利系統の整備・区画の広闊化・田圃の乾田化などの変化が現出する。近代においても分布状況は前代のそれを大きく越え得なかったが、現代ことに昭和後半期において丘陵上面への水田拡大が顕著となり、併せて農地区画のさらなる広闊化が進展していくが、一方では農地の宅地・商用地等への転用が急速に進み、遺跡周辺における景観の劇的な変化を生ぜしめている。

遺跡の立地する旧古閑村は玉名郡大野庄上村からの分村とされており、**[412]** 上村城跡に拠った紀氏系大野氏の支配下に置かれていたと考えられる。上村城の北西約 300m 地点に位置する **[393]** 徳王丸屋敷跡は同城の支城的存在とみられ、当該時期の古閑村支配は同屋敷を経由していた可能性を指摘できよう。なお本文にて触れることは出来なかったが、遺跡周辺において五輪塔とその残欠を数点確認した。北西約 300m にある **[184]** 西照寺跡五輪塔群がもっとも近接しているが、両者の関連性については不明である。

近世における土地利用状況を見ると、正保２年（1645）時点の古閑村石高は 249.2074 石とある（「玉名郡古城道筋山川村高」）。遺跡周辺における大規模土地利用の嚆矢としては、加藤清正によって慶長年間（1596 ～ 1615）に拓かれたと云う行末塘新開が知られているが、当該時期の遺構と想定し得る水田 S303 との関連性は確認出来なかった。

近世後期の農地開発についても具体的な年代は詳らかでない。寛政 10 年（1798）時点での古閑村石高は 355.916 石にまで増加しており（「寛政十年坂下手永村々略鑑」）、今次調査の成果を包摂している可能性は高いが、詳細についてはなお検討を要する。当該時期の周辺遺跡としては **[581]** 村下新地堤防、**[582]** 北原新地堤防などが挙げられるものの、遺跡との立地から関連性は希薄とみられる。

中世以前の遺物に関しては若干の出土を見たが、いずれも遺構を伴っておらず原位置を留めてはいないものとみられる。本遺跡に近在する当該時期の遺跡としては、**[411]** 西松手遺跡（縄文）、**[187]** 野内遺跡（弥生）、**[394]** 大悟山平等寺跡（古代）などがある一方、３区では中世包含層の下位層序においてイネ属型花粉の優位性が見られ、中世以前においても水田耕作の行われていた可能性を指摘し得る。遺跡周辺における調査事例の増加など、今後の成果に期待される。

参考文献

『肥後国誌』（青潮社、1971）

『岱明町史』（岱明町、2005）

『玉名市歴史資料集成』第４集「玉名郡諸手永手鑑集」（玉名市史編集委員会、1988）

『玉名市史　資料編５』（玉名市、1993）

『肥後読史綜覧』（鶴屋百貨店、1983）

熊本県文化財調査報告第30集『熊本県の中世城跡』（熊本県教育委員会、1978）

『荒尾市史　通史編』（荒尾市、2012）

VI. 付論

古閑野田遺跡における水利系統について

士野雄貴

序

古閑野田遺跡の位置する熊本県玉名市岱明町一帯は県北ではもちろん、県内全体でも有数の溜池集中地域である。玉名市における溜池の調査事例としては、一般国道 208 号バイパス工事に伴う浮田溜池関連施設が知られているが、平成 24 年度に実施された古閑野田遺跡発掘調査において、溜池灌漑を水源とする田圃の一部が調査対象となった。

本論では、同遺跡に関わる水利系統について考察を行い、その起源及び時間的推移の様態を把握することを目的としている[1]。

古閑野田遺跡において最新段階に位置づけられる、水田 S101・201・301・401 における水利系統を示したものが第 1 図である（井堰は踏査時に確認したもののみ記載している）。

1）調査 1 区

水田 S101 を灌漑する井手 S102 の本流である井手 1 は、大きく 2 つの水源によって構成されている。県道 168 号を隔てた道向かいの運輸会社東に位置する溜池 B、及び溜池 B を水源とする井手 2 と、字迎田の中尾集落南に位置する溜池 A とである。運輸会社敷地の西隣で合流した両井手は、南流して県道 168 号に突き当たって右曲し、道路をくぐって下流へ至る。

2）調査 2 区

2 区における水利は、一見すると井手 S102 から用水されているように見えるが（第 1 図）、水田 S101 水取の対岸にある開口部は水尻であり[2]、井手 3 からの用水によって井堰 8 から灌漑されている。井手 3 には水源らしき溜池がなく、遺跡東の丘陵状に拓かれた揚水灌漑水田群からの落水を水源にしているとみられる。

3）調査 3 区

水田 S 301 の水源は、4 区に隣接して県道 168 号へ繋がる枝道の道向かいにある溜池 D である。道路下を経由して直接導水されている。

4）調査 4 区

水田 S401 は、県道向かいの水田南隅に拓かれた揚水灌漑田を水源としている。S401 からの落水は溜池 D へ溜められ、水田 S301 下流水田の水源にもなっていたが、古閑野田遺跡調査時点では水田としての機能を停止していた。

これら各水源の現況は第 1 表の通りである。

次に、調査区内における水利系統の変化を見ていく。

中世期の水利遺構には井手 S208 があり、同遺構検出面の 2 区 5 層と対比する 1 区 3 層から検出された水田 S104 とは高低差がほとんどなく、両区の水利系統に差異はなかったと想定される（第 3 図）。3 区には水利施設の存在は確認出来ず、4 区にいたっては当該時期の遺構自体が存在していない。

近世に入ると土地利用状況に大きな変化が生じる。1 区・2 区では造成によって水田が形成され水田面に区ごとの高低差が生じてくるが、これは水田面積の増加とそれに伴う水利系統の分化を意味していると考え

1　本論における水利系統の用語については玉名市文化財調査報告第 23 集「浮田溜池関連施設」（玉名市教育委員会、2010）に倣い、次のように用いた。
用水路＝「井手」、溜池の吐水口＝「底樋」、溜池の余水吐＝「吐井手」、水田への送水施設＝「井堰」、水田の取水口＝「水取」、水田の水吐口＝「水尻」

2　古閑野田遺跡調査中に堰板を嵌めて水嵩を上げ、器材洗浄などを行ったが水田 S201 への流水は見られなかった。

第１表　古閑野田遺跡水源の現況一覧表

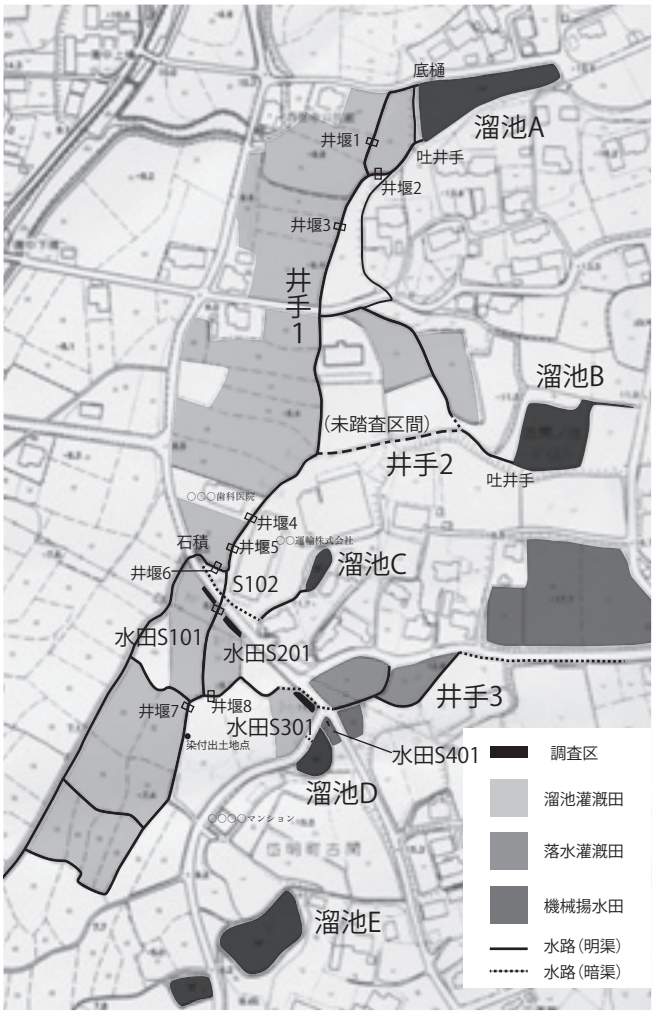
井手１	素掘り井手。溜池A吐井手付近のみモルタル被覆。	
	溜池A	
	堰堤	蒲鉾形、構造物見えず。
	底樋	本体見えず、コンクリート製。昭和期の改修とみられる。
	吐井手	花崗岩切石製、モルタル被覆。傾斜部分は階段状。
	井堰1	土嚢と杭木とから成る。右岸側に用水。
	井堰2	花崗岩切石・凝灰岩製。積み直し痕あり。左岸側に用水。
	井堰3	コンクリート製。下流側に井堰の痕跡あり一部に切石使用、改修2回か。右岸側に用水。
	井堰4	花崗岩切石・コンクリート製。両岸の高低差大きく、右岸側に用水。右岸側本体現存せず。
	井堰5	コンクリート製。井堰4廃止後の改築とみられる。右岸側に用水。
	井堰6	S102（左岸側）への導水用とみられる。
	石積	花崗岩切石製。布積み。左岸側は現県道基礎を兼ねる。昭和後半頃とみられる。
	井堰7	簡易的な構造。右岸側に用水。
井手2	全線踏査出来ず詳細不明。素掘り井手。	
	溜池B	底樋確認出来ず。吐井手コンクリート製。昭和期の改修とみられる。
井手3	水源は揚水灌漑田群からの落水。井堰8からS201へ用水（右岸側）。	
	溜池C	現況は蓮根畠。井堰6下流で井手1に合流。昭和期に大規模改修を受けたとみられる。
	溜池D	井手を介さずS301へ直接給水している。埋樋（暗渠）はポリ塩化ビフェニール製。

られ、井手 S102 の出現はこの時期に想定される。３区では谷 S302 埋没後に水田 S303 が形成され水利系統の出現が確認されるが、４区において水田の出現はまだ認められない。

近代に入ると、２区において新たな水田 S202 が形成され、水取 S203 の出現など水利系統のさらなる変化が示唆されるものの、基本的には従前の形態を踏襲しているとみられる。当該時期の水田分布は大日本帝国陸軍測量部による明治 35 年製地図に詳しく、これを反映したのが第４図である。井手１の井堰群を見ると左岸側の田圃へは水取が設けられておらず[3]、これらは溜池 B を水源とする水利系統下にあるものと考えられる。とすれば井手２本来の路線はもっと集落寄りに設けられていたことが想定し得る。

現代に入ると、２区における水田の水取が水取 S203 から井堰８へ移り、水田 S301 は

3　井堰２上流から細い井手が集落沿いに分流しており、井堰２・３左岸側田圃を用水していたようだが、踏査時点では井手としての機能を終えていた。



第１図　古閑野田遺跡水利系統図（玉名市都市計画図1/2500に加筆）

溜池 D、水田 S401 は機械揚水をそれぞれ水源として３区・４区でようやく大規模な水田が造成され、S401 周辺の台地上の揚水灌漑は余水として水田 S201 へも供されるようになる。井手２の流路が大きく変更され、溜池 C が水源としての機能を喪失するのはおそらくこの時期だと考えられる[4]。

これら用水に伴う出土遺物として確認出来たものは、井堰７下流の井手左岸から検出された染付徳利片１点のみである（PL2-21）。近世でも後半の遺物とみられ、遺構年代の上限を表すものと位置づけられよう。当該時期に近い古閑野田遺跡周辺での土木工事としては、「河野家先祖附」に見える享和元年（1801）以前に行末（いくすえ）川周辺で行われたとされるものがある。溜池 A の吐井手石積と類似した特徴を持つ浮田溜池中之池取水口が文化 13 年（1816）築構とされている点を併せて考慮すれば、井手１・２の開鑿は 18 世紀後半～19 世紀初頭頃に位置づけるのが穏当であろう。

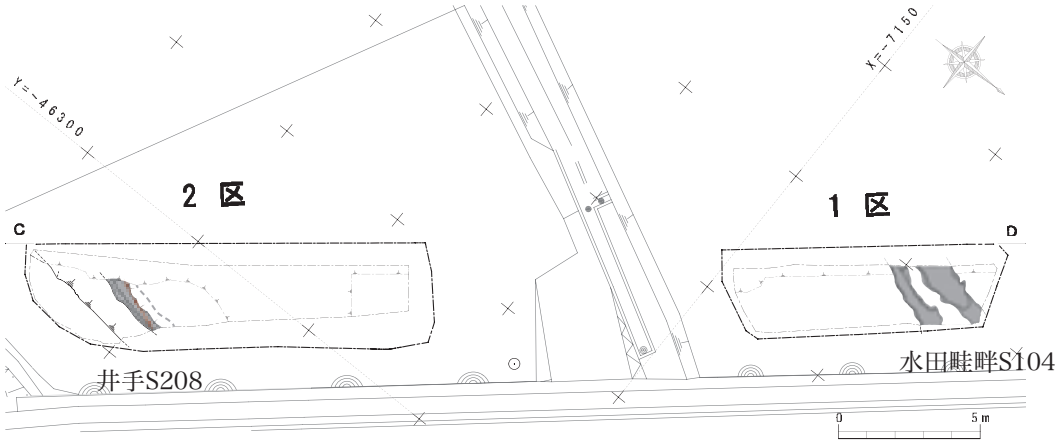
ところで当遺跡周辺は前出明治地図に掲載されており（第２図）、それを見ると当遺跡周辺にある溜池の多くが明治期には存在していたことが判る[5]。これら溜池の名称については明治初年にまとめられた『肥後国玉名郡村誌』に記載があり、それによれば現玉名市岱明町古閑に所在する溜池は５個とされている（第３表）。このうち所在が判明しているのは２個で、そのうちの１つ「坂下溜池」は溜池 B に比定されているが溜池 A については名称が記載されておらず、前出明治地図においても範囲外になっていて存在の確認が出来ない。隣接する中尾集落[6]の住民も「『お池さん』と呼称してはいるが正式な名前は知らない」との由であった。

4　溜池 C の利用期間は、井手２の路線変更に伴って水源を失った水田 S201 が井手３を経由する新水利系統に組み込まれるまでのごく限られた期間だったとみられる。

5　踏査出来た限りにおいて、これらの溜池群は谷状地形を堰堤によって仕切るという共通した構造を有していた一方で、地図に記載のない溜池 C・D は丘陵裾部を大きく掘削して築構されていることを確認している。

6　明治 30 年代頃の加工痕跡を留める石材が集落各所に見受けられ、その頃には同集落が存在していたことが窺える。井手１においては近代以降の改修とみられる痕跡も見受けられたが、溜池 A を見下ろすよう鎮座する光現寺菅原神社境内に明治 24 年銘凝灰岩製鳥居・同 36 年銘石段などの石造物があり、関連性の有無を検討する必要があろう。

第２図　古閑野田遺跡周辺明治 35 年製地図（原図 1/20000、加筆）



第３図　古閑野田遺跡１区・２区における中世期遺構配置図

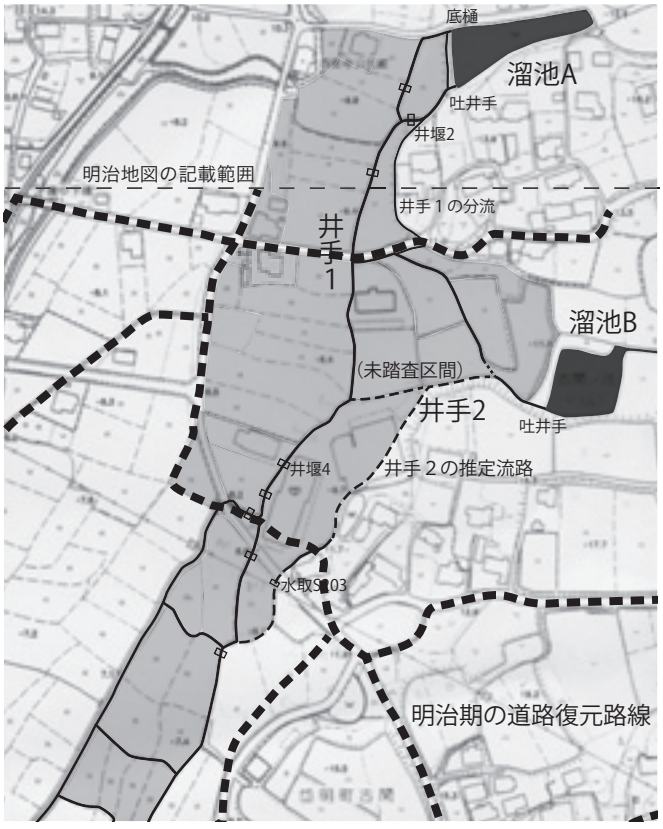
第２表　古閑野田遺跡周辺に所在する溜池の一覧表

番号	古称	所在地	備 考
溜池 B	坂下溜池	玉名市岱明町古閑	玉名市都市計画図には「古閑ノ池」とある
溜池 E		玉名市岱明町古閑	「野田溜池」か？　底樋は改築
溜池 F		玉名市岱明町古閑	堰堤基礎とみられる石列が隣接する農道路面に露出
溜池 G		玉名市岱明町古閑	池内に「1961」銘コンクリート柱あり
溜池 H	市井川溜池	玉名市岱明町古閑	取水口付近コンクリート製。改修を受けている
溜池 I		玉名市岱明町古閑	脇に無銘地蔵あり（「若宮さん」）
溜池 J	夕尺溜池	玉名市岱明町上	大規模改修を受けている
溜池 K	辻溜池	玉名市岱明町上	大規模改修を受けている

第３表　『肥後国玉名郡村誌』に記載のあるため池
（「玉名市内に残る農業用ため池について」より抜粋）

	所 在 地	名 称
45	古閑村	立山溜池
46		市井川溜池
47		坂下溜池
48		野田溜池
49		備中溜池

しかし、当遺跡調査中に地元住民から「この辺（調査１区・２区周辺を指して）は昔から『備中田（びっちゅうだ）』て言いよるもんな」という教示を受けた。「備中から用水を受ける水田（地帯）」を意味するとみられるが、隣接する西照寺（さいしょうじ）地内に「備中」という地名があるものの同地区から用水を受けている形跡はなく、この「（西照寺）備中」との関連で「備中田」の呼称が生じたとは考えがたい。本論では「備



第４図　明治期における井手１・井手２の灌漑範囲推定図
（玉名市都市計画図1/2500に加筆）

中田」の呼称は別の「備中」に由来するのではないかと考え、溜池Aの名称を旧古閑村に存在していたという「備中溜池」に比定するものである。

跋

古閑野田遺跡における水利系統の起源と変遷とについて、ある程度の道筋のようなものを示すことは出来たと思うが、本論において「備中溜池」に比定した溜池Aの正体に関してなど、なお不明な点を多く残してしまった。特に、種々の制約から全線踏査が出来なかった井手2に関しては十分な考察を行い得ていない。機会があればこれらの課題も踏まえた再考を行いたい。

また旧古閑村所在という残り2溜池について、「野田溜池」は溜池Eのことだとみて良いと思うが、残る「立山溜池」が現在確認出来る溜池F･G･Iのどれに当たるのかは明らかに出来なかった。伏して後学を乞いたい。

最後に、本論執筆に際しては長井勲氏のご助言に拠るところが大きかった。ここに謝意を表するものである。

（平成25年9月11日、長井勲氏が急逝なさいました。ついに御披露の叶わぬままとなりましたことを悔やみつつ、衷心より哀悼の意を表し本論を捧げさせていただきます）

参考文献

『玉名市歴史資料集成』第4集「玉名郡諸手永手鑑集」（玉名市史編集委員会、1988）
玉名市文化財調査報告第23集『浮田溜池関連施設』（玉名市教育委員会、2010）
『岱明町史』（岱明町、2005）
地図資料編纂会『正式二万分一地形図集成　九州』（2001、柏書房）
大倉千寿「玉名市内に残る農業用ため池について」（『歴史玉名』第55号（復刊第4号）、2011）
『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会、2000）
『肥後国誌』（青潮社、1971）

PL1　井手1関連施設写真

1　溜池Aの現況（県道側から）

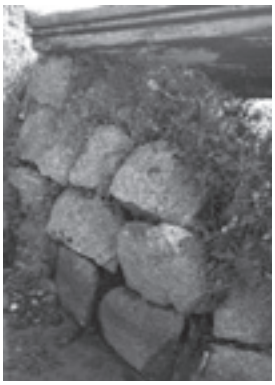
2　溜池Aの吐井手（下流側から）

3　井堰1（上流側から）

PL2　井手１・２・溜池Ｃ・Ｄ関連施設写真

4　井堰２（下流側から）

5　井堰２の石積（右岸側）



6　井堰２の石積（左岸側）

7　井堰３の石積（上流側から）

8　井堰４の石積（左岸側、上流側から）

9　井堰５（上流側から）

10　井堰６（上流側から）

11　石積の現況（左岸側）

PL2　井手１・２・溜池Ｃ・Ｄ関連施設写真

12　石積の現況（右岸側）

13　井堰７（上流側から）

14　遺物出土状況

15　溜池Ｂの現況
（上流側から）

16　溜池Ｂの吐井手
（下流側から）

17　井堰８（下流側から）

18　溜池Ｄの現況

19　溜池Ｃの現況

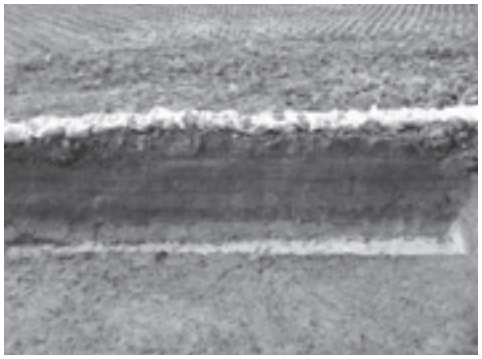
20　溜池Ｃの吐井手

21　井手１出土遺物

写 真 図 版

PL１　１区検出状況・土層断面（全景）

PL２　１区土層断面（接写）



PL３　水田畦畔S104検出状況

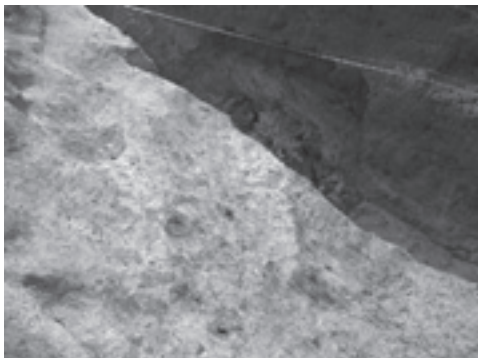
PL４　水田畦畔S104遺物出土状況

PL５　自然流路S204検出状況

PL６　２区土層断面

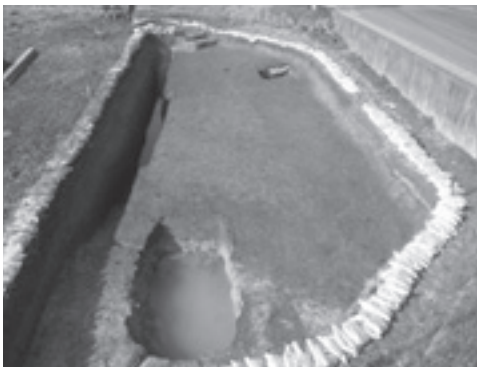
PL７　水取 S203完掘状況

PL８　井手S208完掘状況

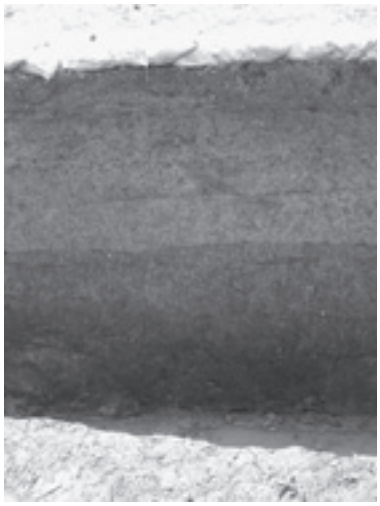


PL９　２区完掘状況

PL10　谷S302・水田S303検出状況



PL11　３区土層断面



PL12　水田S303完掘状況

PL13　谷S302包含層完掘状況

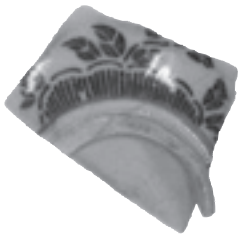
PL14　４区完掘状況

PL15　４区土層断面

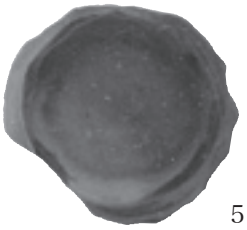
PL16　古閑野田遺跡出土遺物写真 1（掲載番号 1 ～ 13）

1

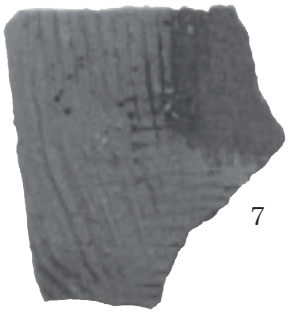
2


3

4


5

6


7

8

9

10

11

12

13

PL17　古閑野田遺跡出土遺物写真 2（掲載番号 14 ～ 25）

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

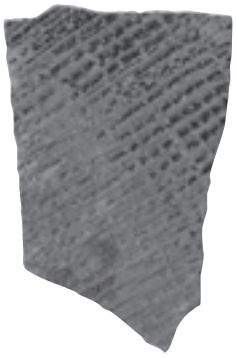
25

PL18　古閑野田遺跡出土遺物写真 3（掲載番号 26 ～ 35）

26

27

28

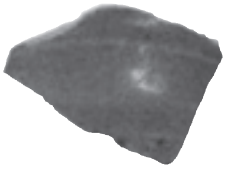

29

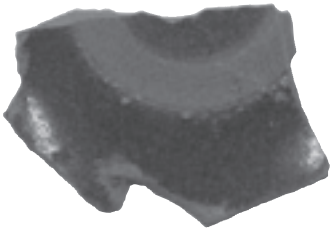
30

31

32

33


34


35

おわりに

古閑野田遺跡では、水田としての土地利用の始まりが中世（鎌倉時代）まで遡ることが、今回の調査によって明らかになりました。

「水利不便、時々旱ニ苦シム」（『肥後国玉名郡村誌』）

干拓によって農地を拡げてきた岱明町で水田を営むにあたっては、農業用水の確保が重要な課題でしたが、古閑野田遺跡の所在する旧古閑村一帯では、付近を流れる行末川が天井川だったこともあって、特に困難な問題でした。それを克服するため、多くの時間と労力をかけて地域の先人たちは問題の解決に努めてきました。

遺跡周辺の水田を潤している用水路と、その水源になっている溜池の多くが、近世（江戸時代）に造られていることも今回の調査で判りました。一部の用水路には小魚をはじめシジミ・イシガイ・スッポンなどの生き物が住みつき、溜池は水鳥たちの憩いの場となっているなど、人びとの生活にだけでなく、自然の営みにも大いに関わっていることも併せて明らかになりました。現在目にすることの出来る風景は、その結果として形づくられています。

この成果が、地域の方々に広く活用され、地域活性化の一助になれば幸いです。

現地での発掘調査及び整理作業においては、下記の機関ならびに多くの方々からご指導・ご協力をいただきました。ここにそのご芳名を記して深く感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

長井勲（故人）、江見恵留・岡本真也・坂田和弘・多賀晴司・馬場正弘・廣田静学・諸富成香・山下義満（熊本県教育庁教育総務局文化課）、地元の方々、熊本県玉名地域振興局土木部、玉名市教育委員会、玉名市都市計画課、玉名市岱明町公民館、荒尾市教育委員会、玉名警察署

報告書抄録

ふりがな	こがのだいせき						
書名	古閑野田遺跡						
副書名	一般県道大野下停車場西照寺線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査						
巻次							
シリーズ名	熊本県文化財調査報告						
シリーズ番号	第 294 集						
編著者名	宮本大・川俣幸次・土野雄貴						
編集機関	熊本県教育委員会						
所在地	〒 862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号						
発行年月日	平成 26 年 3 月 31 日						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
古閑野田遺跡	熊本県玉名市岱明町大字古閑字野田	361（市町村） 788（遺跡番号）	32 度 56 分 2 秒	130 度 30 分 19 秒	平成 24 年 12 月～平成 25 年 3 月	201.2㎡	道路工事
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
調査の成果	生産・包蔵地	中世～近現代	水田・用水路		縄文石器・弥生土器・古代～中世土師器および須恵器・中世瓦器・中世～近現代陶磁器		土地利用の時間的連続性を確認
遺跡の概要	古閑野田遺跡は熊本県玉名市岱明町大字古閑字野田に位置する。遺跡からは縄文石器・弥生土器などの出土も見られたが、最も多く見られたのは中世の遺物と遺構である。行末川の沖積作用によって形成された低湿地上に 13 世紀頃から営まれはじめた水田としての土地利用は、近世に入り灌漑施設の大規模整備を経て現代にまで継続されている。現在目にすることの出来る遺跡周辺の景観における基本的要素が中世に始まることを確認出来た遺跡である。						

熊本県文化財調査報告第294集
古閑野田遺跡
平成26年３月31日
編集　　熊本県教育委員会
発行
印刷　　社会福祉法人熊本県コロニー協会(コロニー印刷)
　　住所　熊本市西区二本木3丁目12-37

発行者　：熊本県
所　属　：教育庁文化課
発行年度：平成２５年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 294 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 古閑野田遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日